
GUNZ OF PATRIOT

もみすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GUNZ OF PATRIOT

【Zコード】

Z3090BA

【作者名】 もみすけ

【あらすじ】

VRMMO「GUNZ OF PATRIOT」で遊んでいた主人公シユウが何の因果か、ゲーム中の能力を受け継いだまま異世界へ召喚され、何だかんだありながら建国します。
ご都合主義の主人公最強物語です。

作者は、今回初投稿および、文才はありません。矛盾点は多々あると思いますが、生暖かくスルーをお願いします。

第1話（前書き）

このたびは、読んで頂ありがとうございました。
初投稿＆お読み内密、そんな武器ねえよーと思われるかもしれません
せんが、ナレはナレ赦を三（—）三

第1話

夜の荒野に風が吹き、砂ほこりが舞い上がる。

小高い丘の上に擬態した1つの人型が片膝を付き左右の肩の上から砲塔と左右の手にそれぞれ持つ狙撃ライフルが同じ方向に伸びている。

近くで見れば、その人型の大きさと重武装の姿に驚く事だろう。片膝をついた状態でも高さが5m以上、立ちあがれば10mを超える巨体を誇る魔導機兵と言われる存在だった。

頭部は大きさの違う四角形を二つ合わせ正面に紅い単眼を持つオリジナル魔導機兵「ヴァンゼ05」だ。

巨大な体躯は重装甲に覆われ、鋭角なフォルムを持つ。その巨体を支える様に巨木を思わせる太い脚部の足裏にはキャタピラを持ち、背中に4基、腰に2基の大型バーニアを持つ事で巨体の移動を助けていた。

遙か彼方へ照準を合わせている各武装も巨体に見合った大きさを誇り、肩の両端に装備した大型シールドや背中に2門ある80mm砲は、砲身を一つに折りたたんで装着され、鉄鋼弾と榴弾の二種類の弾種が選択できる。今は砲塔を伸ばし榴弾が装填されている。腕に装備した槽の内側には2連装の30mmマシンガンが内蔵されているが今は槽の内側に収まつて待機状態だ。

どの武装も人間では間違えても仕様できない大きさがある。この魔導機兵を見た8割は顔を顰め1割が馬鹿だと思い、最後の1割で恐れるだらう。

魔導機兵を操縦する為には大量の魔力を消費し重量が上がれば比例して消費魔力も上がるからだ。

魔導機兵は自分が持つ魔力をつか、大気中に存在する魔素を吸気口から機体に取り込み、魔道エンジンに送る事で魔力をという動力を一種類の方法がある。

しかし、ここで問題が入力と出力は同じでは無いという事だつた。

魔導機兵を操縦すれば魔力を消費し、機体が吸収する以上のペースならば魔力が枯渇して敵に殺されるだけになる。これを回避する為に、背中か腰に魔力槽というタンクを取り付け稼働時間を延ばすのが常識だつた。しかし、この機体には魔力槽を取り付ける箇所に大型ブースターを取り付けている。魔力槽で延命措置を取らず、代わりにバーニアを積んで稼働時間を縮めているのだ。馬鹿と思われても仕方がない。

そして何より、ここまで重武装する火薬庫みたいな魔導機兵は滅多にいない。

魔道機兵の中にいるシュウは肌にフィットした黒いパイロットスuitsを着て同色のヘルメットを被つてコックピットの中に息を殺しながらスコープに映る映像を見ていた。

今シユウが見ている先では軽量偵察部隊が先行して情報を集積しており報告を待つていてる状態だつた。

そして、ヘルメットに内蔵されている無線機から連絡がはいる。戦闘中なのだろう、乱れた音声の後ろから重い銃声が一定のリズムで聞こえてくる。

『偵察班から報告。前方、5000北北東で中級索敵1、重スナイパー1、重突撃4と戦闘中。別部隊も重突撃3機と交戦中です。我々は退却し合流地点へ向かいます。合流予定は10分』

「了解。有効射程に入り次第攻撃を開始します」

『わかりました。そつちに逃げ…』

仲間の言葉の途中に無線が切れ前方に小さな爆発光を確認した。他の仲間からの無線も無い事に先行部隊は全滅したと仮定してシユウは迎撃準備を始めた。

無線が切れてから2分後、スコープが捉えた映像から敵の中に最高

広範囲レーダーの機能を持つ円盤タイプの頭部を持つ索敵タイプが見えた。もう少し近づけばシュウが待機している地点を割り出だろう。

だが、シュウは動かずに照準を向ける。レーダーの範囲よりシュウの射程の方が広範囲だとわかつているからだ。

今のシュウが操縦する機体は遠距離攻撃に調整している。既に射程範囲に入った敵をロックする円形の表示は緑から赤に変わつて攻撃可能だと示していた。

本来なら多数の相手をせずに逃げるべき場面だ。

だが、この場面で何もしないで退くという選択肢はシュウには存在しない。

「装甲が薄い索敵を前に出すな！」

狙撃ライフルがコックピットを狙える距離に近づいた瞬間、一つ咳きと共に操縦桿のトリガーを引く。

一挺の狙撃ライフルは命令を着実に実行し火を噴くヒュウヒュウという音を2回発し60mmの鋼鉄の弾丸を遙か前方にいる索敵機のまず、頭を潰し続いてコックピットに叩き込んだ。

シュウは味方からの報告でもモニターからも遠距離攻撃型の存在を確認したが、不意打ちした位置はまだばれないはずだ。マズルフラッシュは見られた可能性はあるが、まだ距離があり、たとえコックピットを外したとしても頭部にあるレーダーを潰せばシュウの詳しい位置を割り出すのに時間がかかる。その為、頭部を先に狙い一瞬遅れてコックピットを狙つた。

コックピットを貫かれた敵は後方にいるマシンガンを装備した重突撃機へ倒れ、足を止めさせる。

それがシュウの狙いだった。すぐに背面武装の80mm砲を調整しそぐさま発射。

前方から発射された榴弾に気が付いた重突撃機は咄嗟に偵察機を盾

にして爆発からの被害を抑えようとしたが直撃を喰らった偵察機は爆散し、最終的に両腕を失つて重突撃機も戦闘不能状態に追い詰められる。

初撃で2機も無力化出来たと喜びたいが、まだシユウは油断できない。バズーカとマシンガンを持つ重突撃機3機とスナイパーが無傷で残つたからだ。

二度目の攻撃から位置を割り出した残る4機が仲間を殺された怒りに震えバー二ニアとキャタピラを使って回避運動を取りながら突出してくる。

まだ敵の重突撃機の射程内に入つていなシユウは機体を立ち上げると狙撃ライフルをスナイパーに向け撃ち込んで重突撃機には榴弾を撃つて牽制する。

敵はシユウがいる丘を迂回するはずなので5分は時間が稼げるはずだ。そしてその5分を有効に使えば敵を倒しきることは出来る。

(全力で逃げたとしても直ぐに追いつかれ背中から撃たれるとわからきつてるしね…)

シユウを狙撃しようとしたスナイパーの動きが止まつた瞬間をシユウは見逃さなかつた。ライフル弾を撃ちこみ牽制した処でライフルの弾が切れた。リロードする間にスナイパーが逃げるのが分かつていたので、シユウは榴弾を撃ちこみスナイパーの止めを刺す。

しかし、牽制が無くなつた重突撃機が距離を稼いで射程に入つてしまい機体のすぐ横を赤く燃えた弾頭が通り過ぎて地面を広範囲に爆発させる事態に見舞われた。

爆風の範囲に曝され機体へダメージを与えるが、重装甲の機体に損傷は殆どない。だが、予想より敵が速い事にシユウの顔は苦くなる。

(くそつ！無駄な武装を捨てて速度稼ぎやがった)

バズーカの射程はマシンガンより長い代わりに命中率が低い。しかし、爆発という範囲攻撃の為、命中させなくても被害が出る。敵の3機に更に近づかれ連續で撃ちこまれば重装甲でも耐えられないだろう。そこで突撃機達は考えた、余計な武装を捨てて速度を得よう。全速力で移動している時は背面武装の命中率も下がる。それなら邪魔だと取り外し武装をバズーカのみにした3機の選択は正しいし、シュウを苦しめるのに成功している。

シュウは狭い丘の上を器用に動き盾を構えて少しでも被害を抑え、敵の侵攻を少しでも遅くさせようと足搔くが敵の攻撃が激しく反撃回数が減り相手の侵攻を阻むことはできない。

この遭り取りを横から見ている者がいればシュウの撃破は時間の問題と思つただろう。しかし、ただで終わるつもりはシュウには無かつた。

「やつたろうじゃねえか！」「なつたら我慢比べだ」

向かってくる敵に弾幕を張るが距離が短くなりバズーカの爆炎が更に近くに届くようになつたシュウは盾に収納された一連装30mmマシンガンの有効射程に入る前に展開し反撃回数を更に抑える。そして戻とも知らず反撃回数が減つていた故、恐れずに不用意に直進してきた敵重突撃機2機を確認したシュウはバズーカの弾頭を避けた次の瞬間

「なめるなあああ！」

シュウは不用意に来た獲物へ毎分300発を放つマシンガンと大口径狙撃ライフルを向ける。いきなり凶器を向けられた重突撃機は急いで逃れようとするが動きが遅い。油断していたが故、強者の驕りと言えばいいのだろう。いきなりの反撃に数瞬の反応が遅れたのだ。そして、その数瞬はシュウがトリガーを引くのに十分な時間だった。

橋から延びる一連装マシンガンが交互に火を噴き、叩きつけられた鋼鉄の弾丸を受けた衝撃で相手に奇妙な踊りを強要し、持っていたバズーカを弾き飛ばす。そしてライフルの弾丸が敵の機体を貫通して特大の穴を量産して致命傷を与えた。

ライフルとマシンガンの雨の様な弾幕を自分から飛び込むように浴び、自身の体を穴だらけにして鉄屑に変えられた獲物は白煙を上げ、重量物が倒れた為に土煙りが発生し周囲を隠す。

偶然か必然か、その舞い上がった土煙りがシユウの運命を最終的に潰した。

視界が利かなくなつた事に危機感を抱いたシユウは急いで後進した。しかし、それを待つていたとばかりにヴァンゼの右足を衝撃が襲つた。

視界を遮られた為に、残つた重突撃機の攻撃を察知できず直撃を喰らつた為だ。

咄嗟の事態にシユウは対応できずバランスを崩し、同じ場所に2回目の衝撃を右足に受ける。結果、右腕から転倒する事になつてしまい地面を削り飛ばしながら滑る事になる。滑つてから止まるまでの間に右腕はライフルを握つたまま折れて飛んでいき、背面武装の80mm砲は損傷が酷く砲塔は曲がつて使えなくなる。この時点でシユウの持つ80%の武装が無力化される事になつた。だが、シユウは飛んで行く自分の機体のパーツや次々モニターを埋めていく警告を視界の片隅に見ながら敵からは視線を外さない。

残つた左に持つ狙撃ライフルのスコープから送られる映像に煙を上げる砲口が向けられていたからだ。

重突撃機を2機同時に倒した際、シユウは命中率を上げるためにスピードを落としていた。そして、目の前にいる機体はシユウが攻撃して視線が集中している間に丘を回り込んだのだろう。

シユウは無駄と半ば悟つていたが、最後の悪あがきと思い唯一残つた使用可能武装、左手に残つた2連装マシンガンの残弾を全て撃ち

つぐせと引き金を引く。

しかし、損傷した左腕はブレが酷く命中精度は低くなつて殆ど命中しない。

「当たれやああああああ！」

最後の希望に縋りつく様に叫びトリガーを引く。ドドドドッと重い連続音が響くが直ぐに消えていく。そして、一いつ瞬と自分の撃つマシンガンとは違う音がしてシユウを衝撃が襲つた。

「クッ…」

シユウの機体に残された左腕が武装と共に爆散した衝撃だつた。両腕と片足を失い、もはや移動も攻撃手段も残されていない。もうなにも出来ないシユウが敵に翻り殺されるのは自明の理だつた。

「くそー…。やっぱ6機目は無理だつたー！」

モニターに向けて愚痴を零してると敵重突撃機が大口径のバズーカをシユウのいるコックピットへ向ける。

激戦区で5機も単機で倒せば十分強い部類に入るがシユウはまだきらめない。

「まあ、いいか。6機も倒せば上等だろ」

その呟きは今シユウにトドメを刺そうとしている敵の撃破を諦めていない。

座席の下にあるレバーを勢いよく引き、モニターに浮かんだ赤く点滅するボタンを殴る様に押した。

そのレバーには一言「自爆安全レバー」、そして赤く点滅していた

ボタンは「自爆許可」という文字。

ボタンを押した次の瞬間、シユウのいるコックピットは爆炎と光に包まれ、敵の重突撃機と共に消滅する。

シユウは一人で敵侵攻パーティ6人を全滅させた。

「リリはどうなんだよ…」

修治の眼の前には草原しか無く、周囲に人工物は一切見られない。移動した記憶も記憶喪失になつたといつわけでもないが、気がついたら目の前には知らない光景がある。

さつきまで遊んでいたVRMMORPG「GUNN OF PTR IOT」の世界とは違っていた。

あの世界では資源惑星が舞台であり、その星では機族と言われる機械生命体対人類、そして人類同士で戦争をしている設定だった。剣や魔法等のファンタジー要素と銃やロボット等のSFが存在し好きなプレイスタイルを選べる魅力があつたが、惑星は荒廃しており廃墟や砂漠、岩石地帯等の乾燥した風景が殆どであり、ここまで緑豊かなステージは無いはずだ。

何より通常フィールドで倒されたプレイヤーはホームポイントに設定した街で復活するはずなのだが、どう考えても修治がホームポイントに設定した街ではない。

先ほど敵側の重突撃機を巻き込んで自爆したシユウはホームポイントに設定している前線基地のある街に戻るはずなのだが、まったく違う場所にいる。

そして、リアリティを追及された昨今のゲームだが、今修治の眼見映る景色は作り物ではありえない現実感が修治の思考を更に混乱させる。

暫く何も考えられず呆けていると鼻をくすぐる緑と土の香りと体を

優しく撫でるように吹きぬける暖かい風が、混乱している修治を正気に戻そうとし、可能性は低いが有り得る事柄から答えを導きだそうとする。

「回線事故でも起きて近くで遊んでいた人と混線したのかなあ……」

今の時代、殆ど全てと言つて良い程ネットは有線を使わず無線か光通信のどちらかだ、開発初期は混線事故などが起きたが、実装されて40年経つ今の時代に発生する確率は1兆分の1以下だと言われている。

しかし、0%でないなら起きる可能性もある。修治は運が悪かったと思い普段している様に脳裏のメニュー画面を思い浮かべる。

今のゲームはVRで起きた事故を教訓として、メニューを開く等の操作は統一化されている。たとえ、知らないコンテンツだとしても迷う事はない。

修治の脳裏には思つた通りメニューの一覧が出て来るが、普段と違つていた。

普段はメニューの左端にあるログアウトが存在していなかつた。見慣れた一覧にはアイテムや魔法等は存在しているが、ステータスやGMコール、チャット設定、そして一番無くてはならないログアウトが無い。

「バグなのかなあ……でも、こんなのが聞いたこと無いしなあ」

修治は腕を組み顔を顰める。内心落胆しているが悲觀はしていない。他に手はあると思っているからだ。

過去に長時間ログインし、現実世界の肉体が昏睡状態へなつてしまい最悪場合、心臓麻痺で死亡したハードゲーマーが数多くいた為、安全装置の取り付けが義務付けられ、一定時間連続で遊ぶと警告が飛ぶ。その警告を無視し続けると回線を問答無用で切断されるのだ。それを不満に思い一部のユーザーは安全装置をクラッキングして無効にしているが全体から見れば1%もない。そして、ネットゲームのプレイヤーはログインした瞬間から運営の監視を受けている。違反したユーザーは最悪ゲームのアカウントを消されたりするので

修治はクラッキング等を使ってはいなかつた。

それなら時間はかかるだろうが、確實に回線は切断される。休日は潰れてしまつが仕方ないと諦めるしかない。そしてもつと簡単な手もある。

「数時間潰れるのは痛いけど寝落ちにするか…」

寝落ちとはゲーム世界で寝ると脳波を装置が検出し、自動的にログアウトさせる安全策で修治もよく利用していた安全対策だ。

修治は近くの木まで歩きアイテム欄から寝袋を取り出し木の根元に広げ腕を枕にして横になると、そんなに時間がたつ事もなく小さな寝息が漂い始めた。

修治はここで気がつくべきだった。混線したと思い込んだのは仕方ないかもしだれないが、ゲームのアイテムや魔法を使える事実を。そして何より、今の現状が楽観できる状態では無いこと。

「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」「…」

修治は知らない声に睡眠を覚ました。

まだ眠い目を開けると茜色に染まる空と、顔を逆光によつて遮られた二つの女性が視界に映ると修治の意識は一気に覚醒する。

今年で三十歳になる修治だが一人暮らしの上に彼女は大喧嘩の末に別れたりばかりだ。

別れた彼女が来る可能性は、限りなく低い確率があるかもしれないが現実の修治は野宿をした覚えはない。

上半身を急いで起こし、周囲を確かめると夕日に染まる風景。間違えて自分住むアパートの部屋では無いと断言できる。

「ログアウトできてねえ…」

修治は俯いて呟いた後に視線を上に上げ目の前にいる同じ青い布を

巻いた一人の女性を見つめる。

「「やつと目を覚ましたのね」」

修治は西日を手で遮り話しかけてきた一人の顔を確認した。
二人は同じ顔立ち、左右対称の髪型をしており二人の間にはお互いの髪を結い会つて一つにまとめている。言われるまでもなく一人が双子だとわかる。違うのは瞳の色位だった。
もちろん修治は会つたこともない人物だ。

「「はじめましてと言うべきかしらね。私たちは双子神の」」

右側の銀色の瞳をした方が口を開き「私が月天宮」、左の金色の瞳の方が「私は陽天宮」と名乗り、それぞれが太陽と月を司つてゐる
と語つた。

そして二人の声色、抑揚を完璧に会わせた言葉は続く。

「「私たちは、この世界に存在する多くの神々の中に一柱。そして私たちが貴方をこの世界に召喚したの」」

「いや…召喚と言われましても…」

修治は神と名乗った一人をハツキリ言えば信用しなかつた。ゲームをしていて自分の操縦する魔導機兵が敵対プレイヤーに倒されホームポイントへ戻るはずだったのだから、当たり前と言えば当たり前なのだが。

最初は何かのイベントかとも思えたが、こんなイベントが起きる発表は聞いていない。何かしらのイベントが発生する時は運営側からの報告がメールで届くし突発イベントもあるにはあるが、それも毎回何かしらの手がかりは簡単に手に入る。

修治は訝しげな視線を姉妹神へ向け警戒感を顕にする。そんな修治を見ると一人は対称の口角を吊り上げ楽しそうに笑いながら召喚した理由を語つた。

「「ウフフ、そんなに警戒しないでくださいな。この世界では停滞を何よりも忌避しているの。そして世界を動かすには何が一番いいか私たち神々は答えを出したわけ」」

そこまで言われ修治にもやつと理解できた。

つまりこう言う事だ。

「この世界は停滞し始めているから、別の世界にいる俺を召喚した」と…

二人は更に笑い「正解」と言い。お互いの手を取り合ってクルクルと回り始める。そして、この二人の足が地面に着いておらず浮遊している事に初めて修治は気が付いた。

しかし、現実だとしても修治は人選ミスだと思った。修治は平凡なサラリーマンであり特殊技能を持つてないわけではない。超能力や魔法を使える訳でも武道をやっていた事もない。

そんな事を考えていると二人の神は、やはり同じ声と抑揚で口を開く。

「「」この世界に召喚した時の状態、つまり貴方が遊んでいたゲームの能力と一部のアイテムを引き継いでいるわ。ただし、死んだら終わりだけど」」

「なるほど…。つまりGUNN OF PATRIOTのアバターであるシュウが殆どそのまま使えると…」

修治が二人に告げると一人は首肯する。

「「貴方がどう生きようが私たち神々は肯定する。この世界に住む人間達を皆殺しにしようが、導こうが私たちは肯定する」「」

そして二人はクルクル回りながら空に昇つて行き段々と姿が希薄になつて消えていく。

消える瞬間に一人が残した言葉はシュウを奈落の底に落としたか、それとも希望になつたかは謎のままである。

二人の姉妹神は、こう言った。

「貴方には、不老の力と神と同じ寿命を持つわ。望めば永遠に生き続ける事もできる。だけど、殺されれば死ぬし、貴方もその例に漏れないのを忘れないでね」

「ちょっと…ちょっと待って…」

しかし、修治の懇願は聞き届けられる事は無く幾ら修治が叫ぼうが

姉妹神からの返事はない。

「どうしようってんだよ…何も知らないのに…」

そうして修治はシユウとして生きる事を半ば強制的に強いられ、自分が暮らしてきた世界とは別の世界で生きることになった。

姉妹神と別れた後の修治が行つた事は少ない。

体は現実の修治ではなく、ゲームのアバターであるシユウの容姿。黒い髪を持つ典型的な日本人の容姿と180cmの身長。体格はリアルと違うと齟齬が生じると思った事から現実と殆ど同じにしていたので違和感は殆どない。強いて言えば、30歳には見えない見た目20代前半という所だ。

そして意識内にあるゲーム時代のメニューを開き、アイテムや武装、魔法、スキル等の確認をする。

「アイテムで無事なのは弾薬、魔導機兵、各種武装と魔法にスキルか…。お金は単位が変つてるので使えるのかな…」

GUNN OF PATRIOT時代の通貨単位はY^ルと記載されていたが、今の単位はGとなつていて。何と読むのかは分からぬが、9桁もある事から使えれば相当持つていて思つていいだろう。修治は6年以上やり込んだ為、レベルのカンストと転生を繰り返した事でトップレベルのプレイヤーの一人でもあった。でなければ、一人で6機の魔導機兵を相手などできない。

「ヴァンゼの状態はつと…」

魔導機兵の状態を詳しく調べる為、意識を向け内容に苦笑する。プレイヤーは6機の魔導機兵を所持する事が出来るが、先ほどまで使っていた機体の場所が空欄になつていたからだ。

ゲーム時代では、撃破されると1割で倒した相手に装備の一部が奪われ、2割の確率でアイテム名が鉄屑に変わる。そして、自爆攻撃の場合、6割の確率で自爆した時の装備と機体が全て失われる仕様

があつた。当然自爆する時には覚悟をしていたが、ロストは思ったより痛手だ。

「まあ…覚悟はしてたけど…。だけど…機体の予備機はあるからいいけど武装は痛すぎる…」

ヴァンゼ05Jが装備していた武装は全てシユウがゲーム内で設計した予備のないテスト中のオリジナル武装だった。

GUNZ OF PATRIOTでは自分で機体と武装を作れ、まさしくオリジナル専用機が持てた事が多くのプレイヤーを魅了した。そして、優れた武装、優れた機体は高値で取引され武装屋、機体屋等、パーソ屋等と言われる生産職人プレイヤーもいる。

殆どが現実世界の兵器に使えないが、嘘か真か中には実際の兵器に転用可能なアイデアも存在し某国の軍事産業団体がスカウトしたとか噂も出た事もある。

シユウはトッププレイヤーの一人であったが、彼がゲーム世界で名を知られていた理由は戦闘では無く、シユウが造るオリジナル武装と機体が有名だったからだ。

戦闘に出る場合もあるが、それはあくまでオリジナルの武装と機体のテストであり戦績は気にしていなかった。

中には造ったばかりでテスト前の武装を譲ってくれと言うプレイヤーもいたが、全て断っている。テストもせずに渡すのはゲーム世界のアマチュアだろうがシユウの職人としてのプライドが許さない。そしてシユウの造った武装や機体をコピーしようと/or>するプレイヤーもいたが、シユウ本人は気にしていない。

それは、シユウの名前がプレイヤー間に流れ始める原因になつた小型魔導機兵「S01T 残影」を造つた事による。

重魔導機兵並の高出力を持ち、武装も重魔導機兵と同じ威力を持つた武装をさせた。

しかし、これが大不評をもたらす事になる。

魔力の消費が半端なく、普通のプレイヤーは持つて10分。戦闘集団の魔力に優れたプレイヤーでも30分が限界で、何よりも値段が

平均な重突撃兵の5倍した。

そして、高速戦闘になれている小型魔導機兵専門のプレイヤーが眼を廻す程動きが激しくプレイヤーが乗り物酔いを起こしてログアウトするというのが続出したからだ。

しかし、物好きという人はいた。

それでも欲しいと言つた中堅プレイヤーに素材価格で残月を譲り2か月後発生したプレイヤー同士で行う所謂戦争に出撃した残影を買つたプレイヤーは、単機で突撃し5分の間に10機の敵重突撃機兵を屠つてトップクラスの仲間入りを果たしている。

それが話題を呼び、シユウの名前が一気に広がる事になる。

しかし、シユウの造り出す機体は万人受けする事は無く、ほんの極一部のプレイヤーが使って極めれば最高の性能を發揮するという物ばかりだった。

そして、それは武装にも言えた。

最高の貫通力を誇る遠距離砲を造つた時は、重量から一腳重魔導機兵で動かす事は出来ず、最大積載量誇るが移動速度が最低と言われるタンク型の脚を装備したプレイヤーが固定砲台化して使つている。そして、砲台と化したプレイヤーは偵察機からの報告を受けると近く敵を片端から一撃で屠つている事に由来して不動要塞と言わっていた。

その不動要塞が敵国に亡命した時は、激戦区で戦うプレイヤーで戦慄を覚えなかつた者はいなかつただろう。

シユウ本人も武装のテスト中に遠距離から撃たれ一撃で吹き飛ばされた事があり、今まで自分が造つた物がここまでアホな性能なのかと反省した。

不動要塞と言われるプレイヤーはフレンド登録もしていたので、ホームポイントに戻つた後で謝られたが…。

そんな事もあり、ネタとも言える物ばかり造るシユウは本人が自覚せずとも話題に上がつた。

そして、ネタで欲しいと思うプレイヤーと、極めようと思うプレイ

ヤーは多くシユウは多くの設計図をコピーし望むプレイヤーに渡していった。劣化したコピーが出回るのが嫌だったし、製造スキルも最高値近くまで必要な為、造れるプレイヤーも知り合いが多かつた事に起因する。

「まあ、すぐ見なくなつたし、敵国にまで使われる事になるとは思わなかつたけど…」

最初はシユウが造つた機体と武装を使うプレイヤーは多くいた。しかし、余りの使いにくさに数を減らし、今では一部の極めたプレイヤー達がPVPの激戦区で使うのを見るのが殆どだった。

そして使わなくなつた多くのプレイヤーが数多くのネタ武器を高額にも拘らず造り出すシユウを無限の馬鹿だと言つた事からシユウの造つた武装と機体は「インフィニティシリーズ」と言われる事になる。

「まあ、使つてたのはテスト用だし本当に無くして痛いのは別にあるからいいか…」

そしてそんな高額の装備をテスト用と割り切つて使い捨てる神経を馬鹿と言つのかもしぬないが本人は気にしていなかつた。

既に辺りは暗くなり、円に組んだ石の中央で薪がパチパチつと燃えている。

シユウは火の前で地面に座り魚のフライにタルタルソースをかけてパンに挟んでモソモソと食べていた。

GUNN OF PATRIOTでは魔導機兵が入れないダンジョンもあり白兵戦をする事もある。そして食事によってステータス補正がかかるのでシユウも例外に漏れず大量の食品アイテムもつている。

ゲーム時代では味もステータス補正も調理次第で変わるという事がシユウは色々研究していた。

まさか、それがこんな形で役に立つとは思っていなかつたが運が良かったとしか言えないだろ。

ただ、同じアイテム欄に火薬や硫黄なども存在していて変な風に混じつて無くてよかつたと心から思った。

パンの最後の一欠片を紅茶で流し込んでゲップを一つ。

「さて…。残しておいたスキルと魔法の確認をしますかねえ…」
瓶に入つた火薬と各金属のインゴットをアイテムから取り出して並べスキル「弾薬生成」を選んで手を翳す。
そしてゲームと同じ様に呟く。

「弾薬生成 9ミリバラベラム」

翳した手の先にある材料が輝きパンつと軽い破裂音と共に9ミリバラベラム弾が小さい木箱に入つた状態で60発出来ていた。

「ふむ… 弾薬の生成は可能と…。この世界にも材料あれば大丈夫っぽいな」

これで2つシユウの懸念は解消された事になった。

弾薬が無ければ、どんなに強力な銃も役には立たない。ただの鉄の棒と同じだし殴つて使うしか手はなくなる。

そしてアイテムの製作には魔力を使うことだった。

自分の魔力を使うと失敗する可能性はあるが通常より強力な改造弾が造れる場合がある。それに比べ大気中にある魔素を使って製作すると失敗はしないが通常弾しかできない。

今シユウが選んだ方法は後者であり、その結果この世界に魔素がある事を確信したのだ。

ただし、魔導機兵の装備は工場ファクトリーと言われる設備が必要であり、現状作れる可能性は限りなく低い。

「スキルは大丈夫だな。次は魔法か…」

ここで一つ修治は困る事になる。

シユウの覚えている魔法は全て攻撃用では無いという事だ。

シユウが選んでいる魔法職は「エンチャント」であり、附加魔法

と回復魔法しか使えない。

やううと思えば自分の体を傷つけて回復魔法で治すという手もあるが自傷行為をするつもりはシユウではない。移動速度を上げる魔法を使えば良いと思うが、既に辺りは暗くなつており木の根などに足を掬われる可能性もあり使う気にはならない。

「魔法は明日でもいいか。今日は寝よっと…」

今日は、6機の魔導機兵と戦い、自爆してお気に入りの機体を潰し、双子の神に異世界に飛ばされたと思ったらゲームの能力を受け続いでいる。

これで疲れない程シユウの神経は太くない。予備の魔導機兵を呼び出し、片膝を着く待機状態にして乗り込む。

コックピットの座席を倒して横になつたシユウは、明日は人里を探そうと考えながら夢の中に落ちて言った。

ガソッガソッと喧しい音が耳を叩きシートが揺れる。

「うおっ！なんだ！なんだ！？」

シユウは操縦桿を握り、魔道機兵をアイドリング状態へ持つて行くとモニターに映る姿に呆然とした。

心地よい夢の中にいるシユウを文字通り叩き起こしたのは、3メートル以上ある巨大な猪だったからだ。

口から生える鋭く長い牙と荒い鼻息が興奮状態にあるとシユウに教えていた。

ゴフルアー！と涎を飛ばし、足で土を蹴り飛ばして一直線に突撃していく。

シユウは慌てて操縦桿を握り猪の頭を魔導機兵の片腕で受け止める。猪との体格差は3倍以上あり片手でも大丈夫だと思ったが予想通り軽い衝撃を受けたが簡単に受け止める事が可能だった。

「舐めるな！畜生風情がああ！」

昔から低血圧のシユウの寝起きは機嫌が最悪に悪い。口が悪くなるのは仕方無いとも言えるが、猪が知る由もない。

猪は更に力を込めて足を蹴り立てるが無駄とばかりに魔導機兵の腕が押し返す。

「くたばれやあああああ！」

魔導機兵の手を操作し猪の頭を握つて腕を振るう。それだけで猪は巨体を浮かせ5メートル以上離れた所に横倒しで倒れた。

シユウは脚部に収納してある大型オートマチックハンドガンを取り出し右手に握る。

このハンドガンはNPCが売っている中で普通のランクだが、威力と使い勝手の良さから多くのプレイヤーが使っている。

銃口を向け軽く引き金を2回引く。

ドンッドンッと重く乾いた破裂音が2回響き、最初に猪の右前足が吹き飛び、次の音で猪の頭を半分吹き飛ばした。

「どうだこのやろう！」

更にハンドガンの弾を撃ちこみ、猪だった物を肉塊へ変え、弾が切れても引き金を引き続ける。

「眠いい…」

猪を肉塊へ変えた後、しばらくして素に戻ったシユウは血の臭いが立ち込めるキャンプした場所を早々に離れた。

血の臭いに他の動物が来る可能性もあるし、何より血の臭いに酔つたからだ。

シユウが走っている所を、この世界の住人が見たら腰を抜かした事だろう。昨夜試さなかつた移動速度を上げる魔法と肉体強化の魔法を重ねがけし、人間では出せない速度で走っているからだ。

この世界の移動は馬か徒步であり、ハツキリ言えば馬よりシユウの方が早く移動していることになる。

それを誰にも見られる事なく、1時間程で街道に出られたのは運が良いのか悪いのかシユウにはまだわからない。

「どっちに向かおうかな」

シユウは街道をどっちに進めば街に近い事を知らないので近くに落

ちていた木の棒を立て倒れた方向に進む事にする。

運任せ、風任せだと思うがこの世界の事を知らないシユウにとっては数少ない選択肢の一つだ。

魔導機兵で一気に街道を進んでも良いが、この世界の科学技術、魔法技術も知らない状態で魔導機兵に乗つて移動した場合、警戒され、身分が不明なシユウは攻撃される可能性もあるし、利用しようと捕まえる可能性もある。

戦わないで済むならその方がいいし捕まるつもりもない。

巨大猪を倒してから街道に出るまでの間は特に何かしらの障害に出会う事もなく、あの猪は突発的な事態だと考えられたのでシユウはノンビリと街道を歩く事に決めた。

もちろん、最低限の武装はしているが。

そして、そんなシユウを呼びとめる人間は意外と速く訪れる事になる。

「よお、兄ちゃんちょっと待ってくれよ

太陽が高くなり、そろそろ昼食の時間だと思つていると街道横にある林から声が飛んできた。

シユウが声の方へ顔を向けると薄汚れた恰好の男が5人出てくるなりシユウを取り囲む。

どの顔も何が楽しいのか下衆な笑いを浮かべ手には錆びた両刃の剣を持つて威圧している。

リーダーと思われる一際体格の良い男が一步前に出てくる。

「俺達は命まで取ろうって訳じゃねえんだよ。大人しく、金と今着ている服を置いて行きな

そう言つて囮む範囲を狭める男たち。

金を出せと言わても、シユウはこの世界の金銭を持っているか知らない。

メニューで確かに金はあるが、本当に使えるのか知らないし、行き

成り脅迫してくる相手に出す気もないし、露出狂の気もない。

異世界に来て初めて会つた人間が盗賊の類だと思うと先が思いやられる」とシユウは思つ。

「こきなり出てきて金と服を出せと言わされて大人しく出すと思います?」

至極まつとうな意見とは時として他人を怒らせる場合がある。まさにこの時ほど当てはまる場合もないだろう。

大人しく差し出すと思っていたのだろう、周囲にいる男たちは顔を赤くして目つきを鋭くする。武道の達人とかなら殺氣を感じると思うが、一般人のシユウには殺氣を感じるスキルは無い。魔導機兵で狙われた時は、不意打ちをカンで動いて回避に成功したりする場合もあるのに不思議だと思つ。

「だつたら死ね!」

リーダー各の男が叫ぶと周りにいた男たちは剣を振りかぶつて襲いかかる。

シユウは慌てる事なく魔法による身体強化及び防御力向上の魔法をかけた。ゲーム時代に白兵戦で戦つたプレイヤーもモンスターも盗賊達の動きより全然早く、攻撃は鋭い。ハツキリ言つて目を瞑つても避けられると思えたが、痛い思いはしたくない。魔法はあくまで保険として使い、素早く包囲を抜け10メートル以上離れた場所に移動する。

剣も持たない、見たことの無い鉄の棒を持っているだけの無力だと思っていた男が一瞬で消えた様に盗賊達には見えたのだろう完璧にシユウを見失つていた。

殺しに来た相手に遠慮するシユウでは無い。既にここは日本でも無く、ゲームでもない。異世界であり、殺さなければ殺されるという現実がある。

だから、シユウは肩に提げたアサルトライフルを構え安全装置を解除。初弾を装填し銃口を盗賊に向けて引き金を引く。

タタタンツ！

乾いた音が響く3点バースト。前方にいる盗賊の一人が血を撒き散らして倒れる残った盗賊はいきなりの反撃に固まる。
誰かが「魔法使い…」と呟いた様に聞こえたが、「だから何?」とでも言うようにシユウは何度も引き金を引く。盗賊を皆殺しにするのに1分とかからなかつた。

「あー…失敗した」

盗賊を皆殺したシユウは一人落ち込んでいた。
殺した事に後悔したのではなく、殺す前に街までの距離を聞いておけばよかつたと思ったのだ。

未だに街道の先には何も見えてこないし、民家でもあれば色々と聞いてみたいのだが、盗賊が出る様な地区だし、期待は出来ないだろう。

盗賊達の服装から、今着ているバイロットスーツが違ひ過ぎるので一応アイテムで持っていた似た服を取り出し着替えもした。

そうしてトボトボと歩き続け坂を登りきると前方に巨大な壁に囲まれた街が見えた。

まだ遠いが今日中に辿り着ける位置に街があるのは厭がおうにもテンションを上げる物らしい。

再度魔法で移動速度を上げ人間には絶対出せない速さで街まで走る途中で門前に中世ヨーロッパを思わせる兵士と、やはり同じ時代の鎧を着けた巨大な人型が巨大な両刃剣を地面に立て、柄に手を置いて直立しているのが見えた。

魔導機兵という文字がシユウの脳裏に浮かぶがシユウの知っている魔導機兵とはイメージが全体的に違う。

シユウが使う魔導機兵は、現代の兵士と感じるが、前方に見える魔導機兵らしき物は騎士というイメージがピッタリだ。

「この世界でも巨大兵器はあるのか…」

分解したい解析したい、どれだけ力があるのか調べたいとシユウは思うが、素直に調べさせてくれるとは思えないし、教えてくれると言えば何かの詐欺だと思う。

まだ門まで距離はあるが速度を落として歩く事にする。
何が起こるか分からぬ今は使わない方が無難だと思つたからだ。
そして、それは正解だった。

門の前では10人以上ならんだ列が2つ出来ており、兵士の誰何を受けている。

魔法で勢いよく向かつていたら注目を浴びて要らない警戒をされる可能性がある。

シユウも列に並び前にいた30代と思われる口髭を生やした男に話を聞こうとして声をかけた。

「すみません、あの人達は何をしているのでしょうか？」

「ん？ああ、あれは街を訪れた目的と税金を払っているんだよ。知らなかつたのかい？」

「ええ、田舎から出てきて街に行くのは初めてなんですよ」

「ハハハ、そうなのかい？実は、俺も最初は知らなくて驚いたもんだ」

男は自分をペイリと名乗り税金は5Gガルムだと教えてくれた。

そして不慣れなシユウを助けようと宿屋を紹介してくれた事になった。

どうやらシユウの様な者は珍しくないらしく、これが初めてでは無いらしい。

ここは「海鳥の翼」という名の宿屋兼酒場。

ペイリに紹介された宿屋がここだつた。ペイリは実家が、このマイウスという街にあるらしく宿屋の前まで連れて来てくれた後で別れている。

一泊朝食付きで20Gで晩御飯は5Gと宿屋の親父が教えてくれた。

それで構わないと書いて通されたのが今いる部屋だった。

ベットが一つと机と椅子が1脚。机の上には水差しの壺が置いてある。ビジネスホテルと思えば安すぎると思うが、一般的な宿屋だとペイリから言われたので、それを信じるしかない。

外は既に暗くなつており、空腹を感じたショウは下の酒場で食事を取ることにした。

部屋を出て廊下を歩き階段を下りる最中に酒場の喧噪が聞こえてくる。

笑い声、どなり声、何を言つて居るのか呂律が回つていらない声が聞こえる。

テーブルは全て埋まつており、開いていたカウンターの席へ座つた。すると、給仕をしていた茶色の毛並みを持つエプロンを着けた猫耳を生やした女性が声をかけてきた。

「お待たせしましたニヤ。何をお持ちしましょうかニヤ？」

そつ言つてメニュー表を示す。見た事も無い文字だが不思議と読む事は出来る。しかし、書いてある食材の名前と調理方法だろうか、聞いたことの無い名称が並び何をどう調理しているのか想像もつかない。

だからショウは無難な答えを口にした。

「え…っと…お勧めつてあります？」

「それだつたら、今日の日替わりメニューですニヤ。お飲物はどうしますかにや？」

「お酒以外なら…」

「わかりましたニヤ。ちょっとお待ちくださいニヤ」

そう言つて奥へ消えていく猫耳女性。

その後ろ姿を見つめショウは大きくため息をつく。

(ある意味覚悟はしていただけど…本当にこじるとは…。しかも、語尾がニヤですか…)

ショウは姉妹神と会い、異世界へと来た時から人間以外と会う可能性も考えていた。

今まで読んできた小説やゲーム等でも獣人と言われる種族はいるし、エルフやドwarf等の有名な亜人もいる可能性も考慮していた。しかし、想像は想像であり、現実を現実として受け入れると、ここまでシヨツクが大きいのかと思った。さっきの会話も殆ど何も考えずに行つており、日替わりメニューが何なのかも聞いていないのに注文してしまった。

そう悩んでいると数分もしないうちに猫耳女性が戻ってきた。

「お待たせしましたニヤー。温かいうちに食べるといいニヤ」パンと思われる物体が2個と、サラダ、焼いた大きな肉が2枚、柑橘系の果物を絞ったジュースらしきものが出された。

（一体なんの肉と野菜なんだろう…）

周りの人も食べているし毒は無いだろうが、やはり食材がシユウは気になる。

シユウを見ている猫耳女性は「さあ、どうぞ」と田で訴えており、これを食べないという選択肢をシユウから奪っている。ナイフで肉を切りフォークに刺して恐る恐る肉を口へ運ぶ。

「ん…美味しい！」

思わず漏らした咳きを聞いた猫耳女性はエヘン！と豊かな胸を張つてシユウを困らせる。

「このお肉美味しいですね。何の肉なんですか？」

「これはバルバロのお肉ですニヤ」

（うん…聞いてもわからん…）

「そうなんですか。ハハハ」

「ニヤハハハ」

乾いた笑いを浮かべ愛想笑いをしてしまうのは仕方無いと思いたい。食べ続けていると、猫耳女性はシユウの全身を見て疑問に思ったのだろう声をかけてきた。

「そういえば、お客様は何をしている人なんですかニヤ？商人には見えないし、兵士にも見えないから冒険者ですかニヤ？」

「ん…今は無職かな。その冒険者っていうのに興味あるけど」

「だったら、明日にでもギルドで登録をしてくるところにニヤ。ニヤーもこここの仕事が休みの時は冒険者ニヤ」

「そうなんですか。だったら、先輩ですね。えーっと…」

「ニヤーの名前はタマールと言つニヤ」

「私は、シユウと言います。よひしへ、タマールさん」

「ニヤー、よひしへだニヤー」

タマールさんとそのまま話を続け、冒険者ギルドについて詳しく聞いた後タマールさんは仕事へ戻つていった。

タマールさんの話では、冒険者とは何でも屋と同じらしく盗賊退治やモンスターを倒す戦闘の他にも薬草や珍しい植物の採取、手紙を届けたりする配達の仕事があるらしい。

ギルドへ登録すると何度も街を出る場合がある為に街に入る時に払う税金が免除され、上級ギルド員のみが受けられる依頼は高額な報酬が約束されているらしい。

シユウは既に持っているお金が使える事を知っている。そして今のシユウに必要なのはお金ではなく、情報という見えない物だった。それを考えるとギルドという存在は情報を集める事にも、旅を続ける事にも条件を満たすと思える。

食事を終え、人心地付いたシユウは部屋に戻りベットに横になると冒険者ギルドへ行く事を決め、その日は速く寝る事に決めた。

翌日の朝、タマールさんから教えてもらった冒険者ギルドへ向かう。昨日、街に入った時は案内してくれていたペイリさんの後ろを追いかけていたので周りを見る余裕がなく気がつかなかつたが、こうして一人で街を歩くと人間以外の種族が多くいる事がわかる。

二足歩行する犬や猫。昨日出会ったタマールさんは人間に近い容姿だったが、今すれ違つたのは、文字通り二足歩行する猫だった。血の濃さで変わるかもしれないし、タマールさんは人間とのハーフなのかもしねれない。

そんな人間（？）観察をしながらギルド前に辿り着く。

両開きの扉を開くと中には、数人の男女があり、右の壁にはビンシリと紙が貼られ、左は階段になっていた。

正面にカウンターがあり、職員らしきウサギ耳を持つメガネをかけた女性が座っていたのでカウンターまで歩き話を聞く事にした。

「いらっしゃいませ。本日はどのような御用件でしょうか？」

「えと、冒険者の登録をしたのですが」

「では、こちらの用紙に記入をお願いします。記入が終わりましたら、またここまでお越しください」

「わかりました」

シユウはペンを貸してもらい書いてみるが、レジド一つ困った事になる。

この世界の文字は読めるが、書けないのだ。

固まっていると受付嬢は首を傾げて眼で問うてくる。だから、正直に言つ事にした。

「あー…すみません。私は文字を書けないんでした…」

顔を赤くして言つと、クスッと受付嬢は笑い大丈夫と頷く。

「代筆屋さんは隣にいますし、ギルドと提携しているので無料ですから大丈夫ですよ。戻つて来た時に、ミランダといつ名前を出してもらえれば私が出ますのでご安心ください」

この世界では文字を書けない事も珍しく無いのか、すぐ近くに代筆屋が存在した。

そういうえば、免許を取りに行つた時も試験場の隣に代筆屋があつたなあと思いながらシユウは代筆屋で書類を書いてもらつた後に戻ると、再度カウンターに行きミランダさんを呼んでもらつ。ミランダさんに渡した書類は問題なく受理され、一つの水晶を渡された。

「この水晶を握つて魔力を込めてください」

言われた通り水晶を握り魔法を使う時の様に魔力を込める。

すると水晶の中に青い結晶の様な物が生まれ水晶が二つに割れた。

驚いているシユウを余所に水晶は水あめの様に変形し丸い二つの球体になつて固まる。

ミランダさんは、二つに割れた水晶の一つを受け取り説明を始めた。「水晶の一つをギルドが管理、もう一つをシユウさんが御自分で管理してください。その水晶がシユウさんのギルド内の身分証明書になります。この水晶は他の街にあるギルドでも有効ですので紛失には十分気を付けてください。再発行は200Gと少し高いですし」免許証のカードが水晶になつたと思えば分かり易いだろう。再発行に今泊まっている宿屋の10日分の料金だと思うと確かに懐に痛いと思う。

「わかりました。気をつけますね」

「ハイ。毎年何人の無くす方がいらっしゃるので気を付けてくださいね。それと、今日から依頼を受けることは可能です。依頼が書いてある紙と水晶をカウンターに提出していただければ係りの者が説明させてもらいます。その説明と報酬でよければ依頼を受けたという事になります。それと、依頼のなかには期日が決められている物もあるので選ぶ時には注意をしてくださいね。もし依頼を果たせずにいると違約金が発生する場合もありますので。詳しい事はこの初心者ガイドに書いてあるので一読してください」

「なるほど。ありがとうございます」

シユウは分厚い電話帳の様な本を受け取り一度宿屋に戻る事にした。本が以外と重かったし、他にも見ておきたい場所があつたからだ。詳しく言えば門の前にあつた魔導機兵らしき物を作っている現場や薬品を取り扱っている店などだ。魔導機兵の装備を新調できるかどうかを確かめる必要があるし、硫黄などの火薬を生成する為の材料があるか確かめる必要があつた。

アイテムとして火薬や各種薬品、合金のインゴットを持っているが確保できる用処が無いと幾らあっても足りないとしか思えない。

その為に宿屋の親父さんに場所を聞くため戻る事を決めたのだ。宿に戻つて荷物を置いた後、一階の酒場を掃除していた親父さんを見つけ話を聞いてると休憩時間中だつたタマールさんが案内してくれるという話になり一人で出掛ける事になつた。

「「」が鍛冶屋ですか…」

「やうニヤー。」」らでは一番腕が良いって言われている処ニヤ」「シユウがタマールさんに案内された場所は、まさしく鍛冶場だった。ハンマーで熱した鉄を叩く鍛造。鋳型に熔かした金属を流しこむ铸造を目の前で行っている。

「タマールさん、門の前にいた大きな人型の騎士は何と言つんです？」

「あれは巨神兵ニヤ。あれ1騎で100人の兵士を相手に出来ると言われているニヤ」

（なるほど…巨神兵ですか…。何か、巨大な蟲が出てくるアーメを思い出すのはデフォなのでしょうか…）

そんな事を考えている場合では無いと思い、シユウは核心を訪ねる。「巨神兵の部品もこの鍛冶場の様に作っているのですか？」

タマールさんは少し悩んだ後に分からないと答える。

「巨神兵は国が管理しているから、ニヤー達みたいな一般人は分からぬニヤ。兵隊さんになれば分かるかもしねニヤいけど…」「うーん…困りましたねえ。それを知りたかったのですが…」

「ニヤー…」

二人して悩んでいると、立派な鬚を生やしたシユウの半分程の身長だが太い腕をもつたドワーフが近づいてきた。

「おう、そんなに悩んだ顔してどうしたってんだ？」

野太い声がシユウにかけられる。

ドワーフの後ろにいる若者が親方と呼んでいた事から、この鍛冶場の責任者なのだとシユウはすぐに理解できた。

「いや、巨神兵に興味があつてどうやって部品を作っているのか知りたかつたんですよ」

シユウが素直に答えると、親方と言われたドワーフの目付きが鋭くなる。

「お前さん、巨神兵に興味があるつてなんでだ？あれは人殺しの道

具だぞ」

「道具が人を殺すんじゃないですよ。使う人間が殺すんですよ
ゲームだが魔導機兵を使って戦争をしていた人間が言つ台詞だと思
わないが、あくまでゲームであり本当に人を殺すつもりはない。な
によりシユウの興味は設計や開発にあって効率よく敵を倒せるより、
どこまで試せるかと思って作っていた。それが結果的に強力な兵器
になってしまっているわけだが、無責任だが本人は気にしていなか
つた。

シユウの答えにドワーフの親方は唸つていたが、最終的に答えてく
れた。

「ふむ…まあ、それ位ならいいだろ。巨神兵が着けている鎧とか
は俺達が鉄を鍛えて成型しているのさ」

「…なるほど。ありがとうございました」

シユウは深く頭を下げタマールさんと鍛冶場をあとにする。
これでシユウが使う魔導機兵のパートを確保できる可能性は限りな
く〇に近くなり、薬品を扱う店に行つて取り扱っている品物を見せ
てもらつたが、これも空振りに近い。

最悪の場合、最初から自分で使う工場を造る可能性も考慮するべき
かもしれない。

思つたより深刻な状態を悩みながら歩くシユウの隣にいるタマール
は先ほどからシユウを見つめ心配そうな顔をしていた。
そして前を歩いてきた身形の悪い男とぶつかる事になる。

「どこ見てんだコルア！」

そう怒鳴る細身の男。

タマールは只管謝つているが、まるで聞いていないようだ。
ここでシユウはタマールさんの様子が普通では無いと思つた。
幾らなんでもタマールさんの態度が低姿勢過ぎるので。このまま土
下座でもしかねない程に恐縮している。
そして反対に男の方は高圧的な態度を崩さない。

「猫人風情が人間様に打つかつておいて、謝るだけとはな。可愛い顔してるじゃねえか。ちょっとこっちに来いよ。色々と償つてもらうからな」

そう言つてタマールさんの腕を握り露地裏へ連れ込もうとする。

「ニヤツ…許してくださいニヤ…」

タマールは目に涙を浮かべシユウを見る。

(そんな涙を浮かべた眼で見なくても大丈夫ですよ)

シユウはタマールさんに優しく笑顔を浮かべ一度頷くと、引っ張つていこうとする男の手を掴んで外す。

「んだコルア！」

男はシユウを威嚇するような顔と声を向けるが、シユウには届かない。

そんな脅しで引っ込むなら最初から手を出すつもりもない。

「まあ、ここまで謝つてますし許してあげましょうよ。ね？」

まるで幼子を宥めるように男に話しかける。

男は更に激昂してシユウの顔を見ようとして固まる事になる。

シユウの口調は優しいが、その瞳だけは鋭く次は殺すと無言の重圧を放つていたからだ。

この世界に来て既に盜賊を5人殺している。相手は犯罪者だし、正当防衛に当たると思うが今更1人殺してもシユウは何とも思わないと心に決めている。

この世界で殺されかけたら相手を確実に殺した方が安全だと既に学んでいるのだから。

だから、脅しなら一度は許す。だが、二度目は無い。

「私からも謝りますから。この場は退いてくださいよ」

その後に続く、“死にたくないなら”という言葉を男は正確に読み取り、次は気をつけろと捨て台詞を吐いて逃げるようになぞかった。シユウは笑顔で男に手を振る。

「シユウさん、ありがとニヤ…。助かったのニヤ…」

シユウは苦笑を浮かべて顔を向ける。

「御気になさらず。でも、タマールさん疑問なのですが、なぜあのここまで謝つたんです？あの男にも非があるでしょう？」

「それは…私が獣人だからニヤ…」

この答えに首を傾げるしかないシユウ。

(獣人だから？迫害でもされているのかな?)

映画や小説などでも獣人や亜人が人間種に迫害されている内容はあるし、まったく無い場合もある。そこまで思い至り可能性を考慮しなかつた自分の迂闊さに気が付いた。

「今は昔よりも迫害とかは少なくなつたけど、消えたわけでは無いニヤ…。逆にシユウさんみたいに丁寧な対応をしてくれる人は少ない位ニヤ…」

「あー…ごめんなさい。嫌な事を聞いてしまいました…」

タマールさんは首を横に振り気にしていないという。

「ニヤーはまだ幸せな方にや…。性奴隸として売られる事もなかつたし、今は市民権を得られて冒険者にもなれたのニヤ…」

(あー…中世辺りの価値観なら奴隸もありか…。でも、嫌だなあ。俺だつたら…)

ここでシユウの脳裏に姉妹神の言葉が蘇る。

「貴方がどう生きようが私たち神々は肯定する。この世界に住む人間達を皆殺しにしようが、導こうが私たちは肯定する」

その言葉を小さく呟き、無意識に自分のやる事が決まつた気がした。シユウの行動は神のお墨付きをもらつてている。後は実行するか、辞めるかの一いつ。

そして、シユウの答えは既に決まつているが今一步を踏み出せない。だから、その一步を踏み出す為の答えを得る。

「タマールさん…馬鹿な質問かと笑うかもしれません、が、答えることもありますか？」

「何ニヤ？」

「獣人も亞人も人間も差別されない国があつたらどうします?」

「…それは…。うん…それは、ニヤー達が一番欲しい物ニヤ…」

この答えにシユウが全てを掛ける決意は決まった。

これが、後に巨神王という英雄が治める國の始まりになる。しかし、後の歴史家たちを大いに悩ませるこの國に名はない。

歴史家達は俗称として、國の英雄の戦い方からGUN OF PA TRIOT（愛國者の銃）という名で呼んだ。

タマールの答えを聞いた2ヶ月後、この世界の地図を手に入れ検討を付けた遠方まで行く依頼をこなし続けた。

依頼の条件は、開墾が未だに上手くされていない代りに肥沃な大地で海が近い場所だ。

当然、そんな好条件の土地は殆どないが、ただ一力所だけ残されたいた場所がある。

広大な森が海まで続き、冬でも豪雪にならず起伏も殆どない東アルマダという土地だった。

東アルマダは強力なモンスターが跋扈する土地だったが当然、今シユウがいる街を支配する國、ローゼリア帝国は何度も遠征軍を送つて支配しようとした。

しかし、巨神兵を持つてしても倒せない強力なモンスターに出会い全滅の憂き目に会っている。

そこで帝国は考えた、東アルマダに生息する最強のモンスター皇殻亀を討伐した者に貴族の称号を与え、東アルマダの土地を下賜する。

帝国は国軍の損失を出して国力を衰退させるより、いくら死んでも痛く無い冒険者が皇殻亀を倒せば後はどうともなると思ったのだろつ。

帝国から代官を派遣し、倒した本人は帝都へ呼び寄せ傀儡にする事も出来るし、暗殺してもいい。

シユウは、貴族になるつもりは無いが、広大な土地を建前上だが合法的に手に入れられるその情報を掴むとすぐに行動した。

東アルマダに一番近い村で王殻亀の情報を集め、山のように巨大な亀だと知る。そして、その甲羅はどんな剣や槍でも貫くことはできないと。

シユウは所持している魔導機兵で一番貫通力に優れた武装を持つ「ヴァンゼ04」の機体調整をし、重武装で身を固め皇殻亀を倒しに向かう。

「さて、行きますかっ！」

シユウは気合を入れ魔導機兵に乗り込んで森に入る。5分もしない内に来るのを待っていたとばかりに数々のモンスターがシユウに襲いかかってきた。

シユウの操縦するヴァンゼより巨大で3本角を持つ牛、ヴァンゼと同じ大きさで三つの頭を持つ地獄の番人と言われるケルベロス、何十メートルもある百足。

何より大空を飛びまわり火を噴くドラゴン。

伝説上の生き物や、修治が居た世界に存在しない生き物が間断なくシユウを襲ってくるが、シユウの歩みは止まる事を知らない。

戦うシユウに取つては出てくる全ての敵は生き物であり、生き物には必ず弱点があるとわかっているからだ。

ぶ厚い皮膚と筋肉を持つ牛だろうが、目で獲物を追い攻撃するなら眼を潰せばいいし、脳髄を吹き飛ばされて生きている生物はいない。銃の狙いを付け、目と脳髄と一緒に吹き飛ばす。

剣も矢も魔法も効かない固い鱗を持つドラゴンだろうが700mm以上の鋼鉄を貫通する口ケット弾の威力を防げる道理はない。

弾数は限られているが、倒しきれないという事もないし小型のモンスターは踏みつぶすか対人兵器を使えば簡単に倒せる。

モンスターの大半は爪や牙等の攻撃手段しか持っておらず、素早いが近づく前に倒せば脅威でも何でもない。そして、近づけさせないだけの弾幕を張る余裕は十分にある。

シユウが森の奥にいる皇殻亀に辿り着くのに時間は掛からず、シユウが通った道には夥しい数のモンスターの死骸が転がって血の川を作っていた。

「さてはて…でかい亀ですねえ」

シユウの目の前にいる皇殻亀は高さ30メートル、尻尾の先端まで入れば100メートルを有に超える巨体を誇っていた。

「勝てるのかこれ…？」

シユウもここまで巨大だとは思つていなかつた。

今まで出てきたモンスターから予想して、せめてこの半分位の大きさで十分対応できると思っていたが予想は大外れだつた。

「でも、やるつきやないよね…」

皇殻亀は動かずにその巨体を晒している。

シユウは正面からバーニアを吹かし高速移動で皇殻亀の右脇に移動しながら口ケット弾を打ち込む。

噴煙を残し口ケット弾は狙いたがわず皇殻亀の甲羅に直撃し、その威力を遺憾なく発揮するが巨体と比べ、その威力はシユウが見ても心もとない。

しかし、今一番貫通力がある武装はこの口ケット弾だ。

これが効かないのなら打つ手がなくなるシユウは愚直に攻撃を続ける。

すると皇殻亀も流石に効いたのだろう、身ぶりをし、その巨体を支える脚を動かし反動をつけた勢いで尻尾を振ってきた。壁のように迫る一撃をシユウはバーニアを全力で真下に吹かし機体を20メートルの高さまで浮かして避ける。

「あぶねえ……一撃喰らつたら終わりだわ……」

バーニアを切り、着地する寸前に再度浮力を得て衝撃を殺しすぐさま後ろへ後進しながら攻撃を再開する。

ロケットの弾数は残り30程。今のペースで撃ち続ければ2分ともたない。

弾薬の補充は魔導機兵を収納し一定時間経たないと得られず、今戻せば別の魔導機兵に乗り込む前に殺される。

スキルを使えば弾薬を一瞬で満タンに戻す事は可能だ。しかし、このスキルは魔力の半分を消費する為、今使えば森に入つてから戦闘を続けた為に減っている魔力が枯渇し魔導機兵を操縦する事も出来なくなる。

「くそ……ここまで来て万事窮すか……」

一旦退却する事がシユウの脳裏をかすめる。

ここで死ねばゲーム時代とは違い本当の死が待つている。

ホームポイントに戻る事もなく、無残な死体になつた想像が瞼に幻影のように映る。

そして、戦場で戦闘以外の事を考へるという普段はしない事をした結果は無情にもシユウに襲いかかつてくる。

皇殻亀は、その巨大な体躯を信じられない程の機敏さで廻し頭をシユウへ向けたのだ。

「なつ……」

素早い動きで王殻亀が行つたのは、強靭な顎を持つ巨大な口を開き、シユウの乗る魔導機兵の上半身を飲み込み、両足を噛み切る事で完結する。

バキバキッと簡単に魔導機兵の足を断ち切り、口の中に入ったシユウは魔導機兵の上半身と共に王殻亀の体内へ取り込まれた。

シユウは暗いコックピットの中ですを覚ます。

頭痛がして手で頭を撫でればヌルっとした感触と血が持つ独特の鉄臭い匂いがした。皇殻亀に飲み込まれた時から記憶を無いことを考

えると頭を打つて氣絶していたらしい。

「クソッ！」

シユウは自分の不甲斐なさに罵声を上げる。

強力な武器を持ち、高性能の機体を操ってモンスターを簡単に倒していった事がシユウに油断という毒を本人の気がつかないうちに侵食し、慢心という言葉が支配した事に気が付いたからだ。

「情けねえ…」

反省するのは後でも出来る。今は生き残る事を最優先に考えるべきだ。

シユウは直ぐに魔導機兵の状態を確認し、両脚損傷、背面武装使用不可という事実をかみしめる。

残る武装は腕に装備された盾に眠る40mm一連装マシンガン×2。魔導機兵の乗り換えを考えたが暗視装置に映る映像から断念する。垂れてくる液体が機体に落ちると、煙を上げて溶けているのが見えたからだ。

ここまで強力な消化液を生身で受けければ、一瞬で生身等溶けて消えてしまうだろう。

「どうする…どうすればいい…」

頭を抱えて悩むが答えは出でこない。

どう考へても生き残る術は無いと思えた。

「まさか、ピノキオみたいに生きたまま飲み込まれるとは…ん？」

何気なく呟いた言葉にひっかかりを得た。

「キノピオはどうやって脱出したんだっけ…」

20年以上前に聞いた童話を必至で思い出す。使える手だと思えたからだ。

「クジラの中で火を焚いて…」

シユウは視線を周囲に彷徨わせる。だが、燃やせそうな物は何一つない。

皇殻亀の内臓が蠢いているだけだ。

しかし、シユウはゲーム時代に得た大量の物資がある。

「大盤振る舞いで行くか…」

火気厳禁と何重にも貼られている2メートル四方の木の箱を20個、機体の前に出し、10メートル前方に投げる。

箱の中身は、弾薬や火薬、ガソリン等の爆発物。燃える物は木材で無くても大量にシユウのアイテム欄には入っている。

シユウが取り出した弾薬はヴァンゼの全武装の2倍の量だ。爆発で死なない様に残った両腕を使いコックピットの前を十字になるように盾で守り、頭部にある対人用8mmバルカンの狙いを付ける。

「ふー…運任せの博打は好きじゃないけど、やりますかー！」

パパッと頭部から発射された弾丸は狙いたがわず積まれた爆発物に命中し。

光に音がするのならば、カツ！と聞こえただろう。

モニターが一瞬に光で塗りつぶされ、続いて衝撃が機体全体を襲う。

「うおおおおおお！」

シユウの叫びは、遅れてやつてきた爆発音に搔き消されシユウ本人にも聞こえなかつた。

それから6日後、帝都の中心にあるガルアム広場は普段、露店が並び買い物客で賑わっているが、その日のガルアム広場は静まり返っていた。

広場の中心にある噴水の前に、一つの巨大な頭蓋骨が置いてあつたからだ。

そしてその前に1組の男女が立つていた。

噴水の前にあるのは皇殻亀のかつて頭部だった物であり、前に立つている男女はシユウとタマールだつた。

帝都の場所を知らなかつたシユウは一度マイウスの街まで戻り、タマールに相談した。するとタマールもギルドの依頼で帝都へ行くと言つので同道する事になつたのだ。

タマールはシユウが巨神兵（魔導機兵）を持っている事に驚き、そ

の速さに更に驚愕した。変え馬を準備して昼夜問わず全力で移動しても10日かかる日数を2日で踏破したのだから、当たり前だった。

そしてシユウ達が帝都へ着いた日、普段通り露店を出でうと広場へ向かった商人たちはいきなりの事態に準備も忘れ呆けるように立ち尽くす事になる。

日が昇り、仕事に出かける者、買い物に来た者も等しく同じ状態になる。

恐る恐る、初老の男がシユウとタマールへ声をかけ、この骨は何かを聞き王殻亀の頭蓋骨だと答えたシユウを驚愕の眼差しを向け言葉を失う。

シユウの答えを聞いた周りの者たちも信じられないと呟き、見なれぬ髪をしたシユウと隣にいるタマールを見つめ続けヒソヒソと話合つている。

何と無く居心地が悪く感じたが、30分程で白い鎧を着て馬に乗った集団がシユウの目の前に来た。

騎士たちは離れた所で一様に目を見開き、固まる。そして、そんな集団の中で一人だけ固まらずシユウの前に馬を降りて歩いてきた男がいた。

「帝国騎士団団長のクリフだ。お前が皇殻亀を倒したのか？」

「私はシユウと申します。御察しの通り倒したのは私です」

「なるほど…。シユウ殿、一つお聞きしたいのだが一体どれほどの人数で倒したのか教えてくれないか？」

「一人ですが…」

「なつ…。いくら臣神兵あつたとしても一人で倒せるわけないだろう！」

「いや…倒せるわけないと言われても倒してしまったのですが…」

「…まあ、いい。着いてこい城へ案内する」

「わかりました」

クリフは城へ移動する間も何度も王殻亀を見つめ、シユウを見ると

首を横に振る。さつきの会話と良い嘘だと思っているのだろう。

タマールさんは待っていると言つので、城へ向かうのはシユウとクリフ、そしてクリフの部下数人だった。

「見かけない髪の色だが、どこの国の人だ？」

「えー… それは秘密です」

「冒険者に過去を詐索することはタブーだったな。聞いた私が悪かつた」

「いえいえ、気にしてませんよ」

自分は異世界から来たとは間違えても言えない。証明しろと言われて、この場で魔導機兵を出したとしても問題にしかならないだろう。ここは嘘で乗り切つた方が良いと思えたからだ。

この国の巨神兵が束になつても敵わないモンスターを単身で倒したとなれば、極論この国で最強の存在という事になる。

シユウは内心失敗したと思つた。

（どう考へても色々と質問されるよね…）

どんな武器を使い、どんな魔法で戦つたかを根掘り葉掘り聞かれる様子が用意に想像できた。

そんな事を考へながら他愛のない会話をクリフとしていると城の前に総白髪の髪を持つ金糸銀糸で彩られた服を着る恰幅の良い（主に横へ）男と真紅のローブを着て顔を隠した性別不明な人物が待っていた。

「貴様が皇殻亀を倒したと言つている者か？」

恰幅の良い男がそうクリフに聞き、頷いたのを確認するとシユウを見下した様な眼で見つめる。

「では、もう帰つて良いぞ。報酬は後日渡す」

「ナツ…。ナイゼル宰相お待ちください。この者は王殻亀を倒した英雄ですぞ」

シユウはそんな物なのかと思い気にしなかつたが、隣にいたクリフが驚きの声を出した。

「陛下はご存知なのですか！ 帝国の英雄を蔑にしても良いと…」

「黙れクリフ。騎士団長風情が口を挟むな！」

「クツ…失礼しました…」

クリフは唇を噛み顔を俯かせる。そんなクリフを下らないとでも言うように鼻で笑つて踵を返して城にナイゼルは入つていった。

「シユウ殿、申し訳ない。私から陛下へ確認を取るので逗留している宿を教えてもらえないか？」

シユウは帝都に来たばかりで宿を取つてい事を告げ、クリフの部下アンジエラという女性騎士が宿街へ案内する事に決まった。シユウを案内した後で戻つてアンジエラが戻つて報告する為だ。アンジエラと二人並んで広場に向かいタマールと合流して宿へ向かっている途中、アンジエラはしきりにシユウの事を訪ねてきた。

「シユウ殿は、どこの國の方なのですか？」

「ずっと、東にある滅びた国ですよ。小さい國だったので名前を言つてもわからないと思います」

「そうなのですか…。では、どうやつて王殻亀を倒したのですか？」

「んー…。それは内緒です」

「タマールさんも知らないのですか？」

「ニヤーはシユウさんが皇殻亀を倒す所は見ていないニヤ。帝都に来たのは偶然ニヤ」

アンジエラはシユウの答えを聞くと、まるで詐欺師でも見るような顔をする。

「本当に倒したのかよ」と田が訴えている。

そんなアンジエラを無視し、タマールと他愛もない会話を楽しんで『獅子の尻尾』という立派な宿屋へ辿り着く。

「帝都で一番立派な宿屋です。団長からお金はもらっているので、料金は安心してください」

そう言ってシユウ達の背中を押し、宿屋の中に入る。

中に入ると、すぐさま絹の服を着た小太りの中年男性が出迎えた。周りで働いている従業員の服装と比べて上等な事から店の主人なのだろう。

薄くなつた頭皮が窓から差し込む日の光を浴びて光っているのも貴
禄があると思えるから不思議である。

「ようこそいらっしゃいました。本田は、どのような御用件でしょ
うか?」

「ここにちは。部屋を借りられるかしら?えーと…」

アンジエラはシユウとタマールを見て首を傾げる。

それにピンと気が付いた。

「あ、2部」

「1部屋でお願いするニヤ!」

シユウが答えようとするが、横にいるタマールが被せられた方に答へ
る。

シユウがタマールへ眼を向けると、目が合ったタマールは頭の上にあ
る耳と顔を真っ赤に染め俯いてブツブツ呟いてくる。

シユウに聞こえた内容は「2部屋なんて勿体無いニヤ…。同じ部屋
で寝て間違いが起こつても望むところにゃ…」

後半部分はシユウには聞き取れなかつたが、本人が良いと言つなら
良いのだろう。特に気にしない事にする。

前金でアンジエラが主人に布袋を渡し、主人が呼んだ小姓がシユウ
とタマールを2階へ案内すると言つのでアンジエラは城へ戻つてい
つた。

「ここがお部屋になります」

シユウは部屋の中に入り部屋の中を確かめる。

案内された部屋は広く、5人寝ても余裕がありそうなベッドが一つ。

大きな窓からは日光が部屋の中を暖かく照らし、窓の前にはテーブ
ルと椅子が4脚おかげ、お茶を飲むのに良い感じだった。

他にもよく磨かれた家具が数点おいてあり、普段シユウが止まつて
いるマイアスの宿屋に比べれば天と地の差もある。

「良い部屋ですね。十分広さもあるし、これなりゴッククリできや
です」

案内してきた小姓へチップを渡すと、元気よく「ありがとうございます」と

ます」と笑顔を浮かべ戻つていった。

そして合方のタマールが、未だ部屋に入らず廊下にいる事が眼に入つた。

「あれ…タマールさん？」

シユウが視線を向けるとタマールは口を開けて廊下からボンヤリと部屋の中を見て固まつている。

「タマールさん?」

近づいて顔を覗き込むように呼ぶとタマールはビクッと震え、皿に光が戻る。

「ニヤツ…ニヤニヤ…ニヤーツ…」

「いや、落ち着いてください…。どうしたんです?」

「ニヤ…ニヤーはこんな良い部屋に泊まる事なんて今まで一度も無かつたニヤ…。だから、驚いてしまったのニヤ…」

「なるほど…。でも、部屋に入らないと他の人にも迷惑ですからね「さあ、こっちへ」と、タマールの手を引き部屋の中に招き入れる。タマールの頬が赤く染まつているが、慣れていない部屋に入る緊張からだらつ。

椅子に座らせ、置いてあつたコップへ水を入れ差し出す。

「これでも飲んで落ち着いてください。それよりも、何か食べに行きますか?」

タマールは水を飲むと首を横に振る。

「お腹は空いてないニヤ。ただ、ニヤーにはシユウさんが不思議で仕方ないニヤ。海鳥の翼みたいな安い宿に平氣で泊まつていたと思つたら、こんな高級宿の部屋も普通に使える。巨神兵を持っているのも内緒にしているニヤ。王殻亀さえ倒すよつな強い人で、ニヤー達みたいな獣人を差別してないニヤ。まるで別の世界の人みたいニヤ…。」

(- ツ…。タマールさん正解です…)

「ハハハツ。別の世界ですか…」

タマールの言葉に冷たい汗が背中を流れるが、笑つて誤魔化す。

獣人だから、野生の感というのを持っているのかもしれないと思う。「では、少し昔話をしましようか…。そうですね…私の国のことでも…」

（一度ガス抜きも兼ねて、少し話しておくか。機族との戦争もモンスターって事にすれば問題無いしね）

「聞きたいニヤ。そうすればシユウさんの事を知れるのニヤ」「シユウはタマールの対面に座り、ゲーム時代の事を搔い摘んで話す。自分は、この世界の巨神兵に当る兵器を作っていた事や、巨神兵を駆つて戦場に出ていたこと。補助魔法が使える事も話した。

「ニヤー…シユウさんの国では、そんなに凄い戦争をしていたのかニヤ…。それに魔法が使えるなんて凄いニヤー」

「魔法を使える人は少ないんですか？」

「簡単な魔法を使う人は多いニヤ。戦場で使える程ニヨ魔法使いは少ないニヤ」

「じゃあ、魔法を使える事も内緒にしてもらえますか？」

「ニヤニヤ？何でニヤ？そこまで強くて魔法も使えるなら、きっと高い給料で帝国に雇つてもらえるニヤ」

「内緒にしてもらつた方が色々と都合がいいからですよ。この事はタマールさんしか知りませんからね？」

「ニヤー…？」

タマールは首を傾げ、シユウの真意を見分けようとする。

ただ、シユウの考えは単に余計な柵を欲しくないと思つているだけなのだが、タマールには何か高尚な考えがあると思つているのだろう。暫く考えた後、急に顔を赤くして頷いて黙つていると約束してくれた。

「シユウさんはズルイニヤ…。ニヤーの気持ちを分かつているニヤ？」

「え？何ですか？」

「ニヤんでもないニヤー！」

タマールは勢いよく立ちあがり、ベッドにもぐりこんで丸くなつて

しまつた。

その姿をシユウはポカンと見送り首をひねる。

「何かやってしまったのだろうか…？」

シユウの口から零れた咳きに答える者は、この部屋に存在しなかつた。

第1話（後書き）

お読みください感謝感激です。

更新は不定期になると 思いますが、それでも続けて読んで頂けると
作者は泣いて喜びます。

次回の更新はなるべく早く行いたいと思いますが、現在リアルが忙
しいので不明です。

誤字脱字の報告をしていただけると、作者は土下座して訂正をさせて
いただきます。

第2話（前書き）

PV500マーク100、お気に入り2件も頂けて作者は感動と緊張をしております。

読んでいただけた方、お気に入りに登録していただけた方に感謝感激です。

頑張つて面白く更新して行こうと改めて感じました。もう寝るときは、足を向けて眠れないで布団の中で丸まつて寝るようになります。

さて、今回は性的表現を含んでおります。

どうまで許される表現なのか、微妙ですが書いております。言い回し、文才が無いので今回もあやうですが、それでも読んで頂けると幸いです。

「さて……どうしたもんか……」

タマールの機嫌は、あれからも治りずシユウが話しかけても必要最低限の返事をする位だけでシユウを見ようとしなかった。

シユウには何故タマールが無視しているのか分からないが、怒つている事は理解できたので宥めようとしたが全て無駄に終わる。

そのまま夜も更け、お湯で体を拭いてから寝ようとしたら部屋にベッドは一つ。

ベッドにはタマールしか寝ておらず、余裕はまだ十分残されているが、怒つている女性の入るベッドに潜り込んでもいいものかシユウは悩む。

ベッドの前で悩んでいると毛布から頭を出したタマールがソッポを向きながら話しかけてきた。

「早くベッドに入ればいい——ニヤツ！ 夜は冷えるから風邪をひく——ニヤツ！」顔を赤くしてそれだけ言つと、またすぐに毛布を被つて顔を隠す。その可愛い仕草にシユウは苦笑を浮かべ、ベッドの端に入った。

「おやすみ、タマールさん」

目を閉じると小さく声で「——ニヤー」と返事が返ってきた。

「それが、何でこうなる……」

ベッドに入った時、お互に端の方で寝ていたはずだ。

それがいつの間にか、中央によつており、腕の中にタマールが向かい合つて丸くなっている。

慌ててタマールを剥がそうとするがシユウのシャツを掴んで離そつとせず、無理遣り離そつとすると「——ニヤー——ニヤ」と寝言を言つ。

「起きているんじゃないのか……？」

何気なく呟いたがタマールの反応は無い。

頭部にある耳は垂れ、気持ちよさそうな寝顔をシユウに見せていく。

しかし、今シユウには「可愛いなあ」と考える余裕はない。

離そつとしたが、逆に引き寄せられたせいでシユウの胸に柔らかい塊が一つ押しつけられたからだ。視線を向けると宿で寝る時は肌着になるのだろう、旅をしているときは皮鎧を着たまま寝ていたせいで気がつかなかつたが、タマールの豊かな胸が薄着越しに谷間を作りシユウに見せている。

（おいおい… Cか？いや… Dか、それ以上はあるだろ…）

ハツキリ言えば、この時のシユウは色々と固まっていた。シユウも精神年齢は30歳の立派な男だ。女性経験もそれなりにあるし、この位で普通は同様しない。

しかし、今のシユウは初心な少年の様にどうすればいいか分からなくなっていた。

それは、この世界に娼館等がある事をシユウは知っていたが、一度も利用していないからだ。

何故か？

それは、修治の時に習つた歴史授業でアメリカ大陸を発見したコロンブス達がヨーロッパに梅毒を持ち帰つて爆発的に感染範囲が拡大し、感染者が続出した事を知つていたからだ。

この世界にも性病はあるかもしれないし、なによりそれが不治の病だつた場合を考えれば恐ろしくて、複数の相手をする故に感染している可能性がある為、固くなる物もならなかつた事に起因する。

シユウが活動拠点にしているマイウスの街にある色街を通りには、濃い化粧をした獣人や亜人のお姉さんがシユウを誘つて来て何度も誘惑に負けそうになつた事か…。

その誘惑を撥ね付ける為、ギルドの依頼を我武者羅にこなしていた事が逆にシユウの首を絞める事になつたのはなんと言つ皮肉だろうか。

この世界を知るためギルドの長距離移動をする依頼を集中して選び

短期間で次々と達成していくシユウの名前が街に流れ始めると娼婦達の眼付が変わることになる。

長距離移動する依頼の多くは日数が必要であり、命の危険が高い。盗賊や山賊、モンスター等に遭遇して死ぬ場合もあるし、事故にあって死ぬ事もあるので報酬が高くなるのは当然だつた。それをシユウはいくつも同時に受け短期間で達成していたのだから金を持つていられないわけがない。

懐を温めて欲しい娼婦達はシユウが通るたびに腕を引き、娼館に連れ込もうとする。しかし、シユウが頑なに拒み続けていた。

すると、「種なし」「たたないのかい?」「フニヤチン野郎」等を言われ、シユウは軽く凹んでたりする。

しかし、この世界に来てから数か月。

既に我慢も限界に近い。色々な意味で体が硬くなり始める。今なら鉄板でも打ち抜けそうな気さえしてきた。

(つおおおお…我慢だ。我慢!落ち着け俺…)

歯を食いしばり鼻息を荒くして耐える。

「つうううう…

すると、シユウの呻き声で腕の中にいたタマールが軽く身じろぎして目を開いてシユウと視線が重なる。

「ニヤツ…

タマールは今の状況に驚きの声を上げるが、自分の脚に固い物がある事に顔を赤くして離れようとはしない。

「う…ごめん。タマールさん直ぐに離れるから

シユウがタマールから離れようと身を起こした次の瞬間、理性という防壁を吹き飛ばそうとする言葉が紡がれる。

「…シユウさんが、したいならニヤーは良いニヤ…」

暗闇の中、頬を紅く染め上目遣いにシユウを見つめる目は潤んでおり、掴んでいるシャツに力が入る。

「いや…いやいやいや…タマールさん何を言つてゐるのよ」

動搖のあまりシユウはオネエ言葉になってしまつが、タマールはシ

ユウから視線を外さない。

そして力強く自分の気持ちを語る。

「ニヤーはシユウさんの事が好きニヤ。ニヤーが猫人族なのに、差別しないし丁寧に接してくれたニヤ。ハツキリ好きだと思えたのはマイアスの街で助けてもらつた時からだけど、この気持ちに嘘は無いニヤ…。帝都に行くつて言われた時は離れるのが嫌で着いて来ちゃつたニヤ…。シユウさんは、こんなニヤーは嫌ニヤ？迷惑ニヤ？」涙を浮かベシユウの胸に顔を埋めるタマールをシユウは無言で見つめる。

（タマールさん…それは俺が異世界から来た人間で、この世界の事を知らないからだよ…。それに差別は確かに俺の中にも存在しているよ…。ただ、それは俺がいた世界の問題なだけだ…）

「シユウさんは優しい人ニヤ…。シユウさんに断られてもしあうがニヤイと思つてもいるニヤ。だけど、ニヤーに後悔は無いニヤ」

「…。タマールさん…一つ話を聞いてもらつてもいいですか？」タマールは突然のシユウの言葉に断られるのかと思いビクつと一度震え、恐る恐る顔を離してシユウの顔を見つめる。

「急にどうしたのニヤ？やつぱり、ニヤーみたいな獣人は嫌ニヤ？」

シユウは上半身を起こし首を横に振る。

このまま黙つたままタマールを抱くのは簡単だ。だが、自分の気持ちを正直に伝えてきた女性にそんな不義を出来るほどシユウは器用ではなかつた。

だから、シユウは自分の境遇を静かに語りだす。

「タマールさん…。俺の本当の名前は、小山修治つていうんだ。そして、俺はこの世界とは世界から来た人間なんだよ…」

「ニヤ？別の世界ニヤ？」

修治は頷きを一回。

「双子神の月天宮と陽天宮にこの世界に召喚されたんだ…。俺のいた世界には人間しかいなかつた。だから、この世界の歴史を知らないし、獣人に対して偏見もないだけなんだよ」

「…。でも…でも、そんなの関係ないニヤ！」

「双子神の力で不老の存在にされたのに？俺は、この世界に来た2日目に盗賊を4人殺しているし、ギルドの依頼でも襲つてきた盗賊を何十人も殺していいよ？そんな血にまみれた俺でもいいの？俺は老いる事も無い化け物みたいなもんだよ？」

タマールも上半身を起こし、シユウの正面に移動して右手をシユウの顔に力強く手を当てる。

「シユウさん…。いくら人を殺して血に塗れたってシユウさんが優しい事に変りは無いニヤ。きっと歴史を知つてもシユウさんは大丈夫ニヤ。それに不老なんて羨ましいニヤよ？きっと、もし何十年後もシユウさん一緒にいたら老けたニヤーを見てシユウさんが幻滅しちゃうニヤ」

そう言つて笑うタマールを見つめ、無意識に涙を流しながら笑つている事にシユウは気が付いた。

（あれ…？何で泣いているんだ？）

タマールはシユウの頭を胸に抱く。

「ニヤーは今の話を聞いて、シユウさんがもつと好きになつたニヤ。シユウさんが辛くて泣きたい時はニヤーが胸を貸すニヤ。だから、シユウさんがやりたい事をするニヤよ？」

そう言つてシユウの頭を優しく撫でるタマール。

（そつか…。この世界に来て初めて安心出来たのか…）

シユウは、平和な日本で生まれ映画や漫画等のフィクションの戦争しか知らない。

当たり前だが、本当の人を殺した事もない。この世界をゲーム世界の延長と考える事で人を殺す事、生き物を殺す事への忌避感を誤魔化し、不老という生物以外の何かになつた事を忘れる事で精神の均等を保つていたのだ。

その枷が外れた反動で涙が出た事にシユウは気が付いた。そして、枷を外してくれたタマールに深い愛情を感じる。

（ああ…俺は救われたのかもしれない…）

だから、シユウはタマールへ想いを伝える。

この世界でも人は簡単に死んでしまう。伝えない事で後悔をしたくはなかつた。

「タマールさん…俺もタマールさんが好きだ…。だから、お願ひがあるんだけどいい？」

「ニヤ？」

「タマールさんを抱きたい！」

シユウの発言に撫でていた手が止まり、頷く気配。

「ニヤーは最初から良いつて言つてるニヤ。恥ずかしいから、何度も言わせニヤいで欲しいのニヤ」

シユウはタマールの胸に顔を埋めたまま強く抱きしめ押し倒し、軽く悲鳴を上げたタマールの口を自らの唇で塞いで強く吸う。最初、タマールは緊張から強張っていたがシユウの激しいが優しい愛を感じ緊張を解きシユウを受け入れた。

暗い部屋に一つの影が蠢き、夜は更けていった。

まだ薄暗い早朝にシユウは目が覚めた。

部屋の中は汗の臭いと体液の匂いが充満していたので窓を少し開け、換気をしながら水差しから水を飲み部屋のベッドの惨状を見て苦笑いする。

「やり過ぎたかな…」

乱れたベッドの上にはうつ伏せに倒れ、荒い息をして寝ているタマールが全裸で寝ていた。

まだ外の空気は少し冷たい。シユウは毛布をタマールにかけ、乱れた肩までの髪を優しく手で梳ぐ。

「タマールさん、あなたの御蔭で救われましたよ…。彼方の気持ちを聞けて幸せです」

優しく語り掛けた言葉に、寝ているタマールは軽く身じろぎして、「

ヨ「ニニエ」と寝言を呟いている。

「ニヤーもニヤー」という言葉に苦笑を浮かべ、ベッドから離れて扉を静かに開けて廊下へ出る。

宿屋の朝は早いので、この時間でも階下では誰かしらいるだらう。汗を拭いたかつたのでお湯を貰ったかったのだ。

シユウの予想通り、店主と何人かの制服を着た小姓が走り回っている。

店主はシユウを見つけると笑いながら近づいてきた。

「おはよつじざいます。タベは、遅くまでお楽しみでしたね」

この発言にシユウの顔は赤くなる。ベッドの中にいるタマールの声は大きくシユウも防音性は大丈夫なのか気にはしていたが、数か月に及ぶ禁欲生活はそんな不安を軽く凌駕していたので途中からは考えていなかつた。

どうやら、聞かれていたらしい。

「『安心を、お客様の部屋の左右二つの部屋は空いておりますので他のお客様へは聞かれていません』

（ちょっと待て…何でお前は知っている…）

シユウの当然の疑問を感じ取つたのだろう、店主は慌てた様子で両手を勢いよく何度も振つた。

「身回りをした小姓の一人が、扉を通りかかった時に聞いたらしいのですよ。ハハハ」

乾いた笑い声を上げる店主を人睨みして黙らせ、降りてきた目的を言つ。

「体を拭きたいので、桶にお湯を頂けますか？」

「少々お待ちください。今沸かしていますので沸いたらお部屋にお持ちしますよ」

「お願いします」

シユウは店主に、「インを何枚か渡し部屋へ戻る。

部屋に戻るとタマールは目を覚ましていたが、動けないのかベッド

の上から移動していなかった。

「タマールさんおはよう。大丈夫ですか？」

「う…おはよう…」
「ちょっと腰が痛くて動けそうに…」
「…」

シユウはコップに水を汲みベッドまで移動するとタマールの横に腰をおろした。

タマールを仰向けにし、背中に手を回して上半身を起す。

「水だよ？飲める？」

「嬉しいの…」

喉が渴いて苦しかったの…」
コップをタマールの口へ持つて行き飲ませようとするが、タマールは首を横に振る。

「どうしたの？飲みたいんじゃないの？」

するとタマールは頬を紅く染め、か弱い声でシユウの耳へ囁く。
シユウの顔も紅くなるが、口に水を含みタマールの唇に近づける。
二人の唇が触れる瞬間

「ンッ…ンッ…ガチャッ

「お湯をお持ちしましたー」

突然開かれる扉の前には、昨日部屋に案内してくれた小姓の少年がお湯の入った桶を持ち立つべしている。

「…」

「えつ…しつ失礼しました」

暫く固まっていた少年は桶を其の場に置いて逃げるよつて部屋を出る。

バタンッと勢いよく締められた扉の音の音に続き、ドタドタと廊下を走る音が遠ざかる頃に止まった部屋の時間が流れだす。

「…」

含んだ水を飲み込み、固まつたままのタマールへ語りかける。

「ウゥウウ…シユウさん以外の男に裸を見られちゃったニヤ…」

涙目になるタマールの頭を撫で、涙を拭いてあげる。

「タマールさんの身体は綺麗だから見られて恥ずかしい物じゃないよ。それに、触つていいのは俺だけだしね。まあ、次見たら怒るけど」

「ニヤツ・・・ングツ」

何か言おうとしたタマールの口へ、再度口に水を含んで塞ぐと、ンクッとタマールの喉が鳴り、そのまま舌を絡める。

少し苦しそうに暴れるタマールの体を強く抱きしめ抑えてから、第2回戦の幕が開けた。

若くなつた身体と数か月の禁欲生活は一晩で解消しきれず、昼前まで及んだ。

朝は人の通りも多く、流石に恥ずかしかつたのだろうタマールも声を必死に押し殺していたが、その姿が可愛らしくシユウの嗜虐心を煽つてしまい更に激しくなる行為でタマールは途中で気絶してしまう。

流石にやりすぎたと反省し、既に水になつてしまつたお湯を再度貰いに行つてお詫びとばかりにタマールの体を綺麗に拭いて身繕いをする。

タマールが目覚めるまで椅子に座り時間を潰しているとノックがされ入る様に言つたら洗濯婦だと名乗つた狐耳の恰幅の良い女性が現れた。

荒れたベッドと失神したタマールを見た女性は實に良い笑顔を浮かべる。

「昨夜は激しかつたのですねえ」という言葉にシユウは頭を搔いて苦笑するしかない。

(いや・・・実は朝もです)

そんな事を思つていると、ベッドメイキングするといつので女性の

言葉に頷いたシユウはタマールを綺麗な布で包むと所謂お姫様抱っこをして椅子に腰を降ろした。

狐耳の女性は手早く汚れたシーツや毛布を回収し、ベッドを綺麗にしていく。

「終わりました。朝食をお出し出来る時間がもう少しで終わってしまいますが、お部屋にお持ちいたしますか？」

「では、お願ひします。それと、その桶も片づけてもらひつていいでしううか？」

女性は分かりましたと言い、一礼してから部屋を出て行く。

そんな後ろ姿を見送りドアが閉まつた頃にシユウは声を出す。

「…タマールさん起きてますね？」

ビクッと腕の中にいるタマールが動く。

「何で寝ていたフリをしていたんです？恥ずかしかったですか？」

一度縦に頭が動き耳が紅く染まる。

（もう可愛い人ですねえ…。だから少し苛めたくなっちゃうんですよ）

シユウがタマールを抱き上げた時、タマールの瞼が何度も震え薄めになつてゐるのをシユウは見逃さなかつた。

「シユウさんは意地悪ニヤ…。昨夜、あれだけ激しかつたのに朝もニヤんて…」

タマールは唇を尖らせて抗議し、シユウの腕から逃れると肌着と服を着て、その綺麗な体を隠す。

その姿を後ろからシユウは眺めていたわけだが、タマールは気に入る事は無かつた。

タマールが着替え終わると朝食を持ってきた犬耳の少年から朝食を受け取り部屋で一人向き合つて朝食を取りながら今日の予定を話あう。

「王城からの使いはアンジロラさんが来るつていう話だつたけど、時間がかかるとも言われたから今日中に来る事もないと思うんだ。時間あるけど、タマールさんは行きたい場所とかある？」

スープを汲んだスプーンを咥えていたタマールは頷く。

「ニヤーは一度、ギルドに行つて依頼の品を納めて来たいニヤ。シロウさんのお陰で余裕はあるけど、早く届ければ報酬に上乗せもしてもらえるニヤ」

「いいよ。それじゃあ、これを食べたら、ギルドに行こうか」

その後に行きたい場所を話し合しながら、他愛もない会話を楽しむ。シユウにとってその日の朝食は、この世界に来てから一番楽しい食事だった。

第2話（後書き）

お読み頂ありがとうございます。

今回は、男女の嘗みについて初めて書いてみました。

いや、難しいですね。前回の戦闘シーンも、頭を捻つて考えましたが、今回も捻りに捻つて絞り出しましたが、こんな内容になりました。

一応、誤字脱字な無いか確認して書いておりますが、作者の中學から高校の国語の成績は5段階の1と2で埋め尽くされております。作者が気がついていない間違いを教えて頂けると幸いです。
それでは、今回まじめでということです。

第3話（前書き）

いつたい全体何が・・・。

総PV1400超、ニーク200超
評価もしていただき。お気に入りも9人の方に入れてもらえている
なんて感激です。

稚拙な文ですが、多くの方に読んで頂けて作者は泣きやうです。ありがとうございます m(—)m

今回もう都合主義になつております。

ここでお詫びを。

説明に建国しますと書いてありますが、作者の文才では、まだまだ道のりは長そうです。どうもすみません m(—)m

例の「」と「」、誤字脱字が多くあつて読みにくい箇所があるかもしれません。

ご指摘頂けると、作者は土下座した後で修正させていただきます。

朝食後、タマールは訪ねて来る人がいたら拙いと思い直しシユウに宿屋に残る様に言つたが、伝言を宿屋に残してもらえば良いと説得し一緒に行くことを決めた。

宿屋の主人にギルドの場所を聞き、アンジェラが訪れた場合の対応を伝えておいたので問題は無いはずだ。

二人は帝都の中心を走る幅10メートル程の大通りを歩いてくる。

「帝都は人が多いニヤー…」

帝都の大通りは、確かに獣人や亜人が数多く見られシユウが拠点にしていたマイウスの街に比べて道も広い。しかし、シユウが修治として生きていた日本に比べると人も少ないし、道も狭い。

ここまで多種な人種（？）はいないが。

「そういえば、この国って大きいのですか？」

「ニヤニヤッ！…シユウさん、それ本気で言つてるニヤ？」

「もしかして常識でした？」

シユウの発言に、タマールは額くと皺が寄つた目頭を揉み、シユウが異世界から来た事を思い出すと「ニヤー…」と鳴く。

「シユウさん、この帝国の名前知ってるニヤ？」

「ローゼリア帝国でしょ？帝都の名前も同じローゼリア」

「そうニヤ。そのローゼリア帝国は、このアラギラ大陸で一番大きな国ニヤ。大陸の何割を支配しているか知つているかニヤ？」

この質問には首を横に振る。帝国以外にも国があるのを知つていたが、シユウが手に入れた地図は帝国の一部が書かれているのが殆どで精度も良くない。長距離の依頼を数多くこなしていたが、世界地図など何処でも見なかつたし、2か月程では全ての地区を回ることなど不可能だつた。

「そんなに、このローゼリア帝国つて大きいのですか？」

だから、この質問はシユウにとつて当然の物だつた。しかし、タマ

ール達の様にこの世界で暮らす人々には常識だつたようだ。

タマールは出来の悪い生徒を叱るよつて腕を組んで指を一本立てシ

ュウに振りながら答える。

「ローゼリア帝国は、大陸の4割を支配しているニヤ。属国も含めれば5割になると言われているニヤニコ？」

「確かにそれは大きいですね…」

「ローゼリア帝国は属国に軍も常駐させてるし実質支配率は5割二ヤ。それは兵士の数も巨神兵の数も一番多いからと言われているニヤ」

「確かに数は力つて言いますしね…」

シユウはタマールの答えに頷く事しかできない。嘘か本當かの区別も出来ないし、タマールが嘘をつくとは思つていない。

「ニヤーが生まれる前に帝国の支配から脱しようとした亜人の国が幾つか出たけど、殆どの国が滅ぼされたニヤ。生き残つたのは奴隸にされて売り飛ばされたりして、今は北の雪深い地域に逃げ延びた国々が同盟を組んで帝国の侵攻を止めているニヤ」

「んー… それつてノーアイル同盟の事?」

ノーアイル同盟の事を知つたのはシユウが北の国境近くにある城砦都市ノスアギヘギルドの依頼品を届けた時だつた。

ドワーフやエルフ等の亜人と多様な獣人の国で人間種と敵対しているらしく、ノスアギに着いて荷物を渡したギルド員に注意された。

「ノーアイル同盟は帝国に比べて食糧の生産率も低いし國も狭いニヤ。小競り合いも多いつて話を聞くけど、帝国相手になると団結して闘う強い国ニヤ」

「んー… 帝国だと亜人の迫害があつて、同盟だと人間の迫害か…。何か嫌な世の中だね…」

「ニヤーもそう思つけど、これは仕方ないと思つニヤ。お互に殺し合ひの戦争を何度もやつてゐるニヤ」

「……」

シユウは、この発言に何も言う事はできなかつた。

知らない事を語るつもりも無いし、その資格もないからだ。

この世界の事をまだまだ知らないシユウはタマールが以外と博識な事に驚き、他の事も教えてくれた。楽しい話ばかりではなかつたが……。

帝国内の奴隸売買は合法で、奴隸から解放されるには1年ごとに更新する市民権を獲得しなければならず、その値段は人間種では平均2ヶ月分の給料で安くはないが払える額だつた。しかし、人間種以外に発行される市民権の値段は、獣人や亜人が受け取る平均給与の半年分近くにもなり、殆どの者は奴隸になるしか無くない。

タマールは宿の給仕以外でも冒険者としても働いているので何とか払えていると語つた。

そして、冒険者になる力も無く、仕事もないが奴隸になりたく無い者は、市民権をもたない流民になるか違法な商売に手を出して犯罪者になるかの一通り。

そして、犯罪者は若く健康であれば奴隸として売られ、歳老いたり力の弱い子供は処刑されるといつ。

シユウは、その話を聞いて無意識に歯を食いしばり口の中に血の味を感じた。

ギルドの依頼で別の街へ行くと必ず奴隸市場が開かれているのをみかけた。そして、首輪をつけられた無気力な眼をする子供を見ると無力な自分を情けなく思つた事を思い出したのだ。

フェニミストを気取るつもりは無いが、虫唾がはしりもした。

旅の途中で聞いた話の中には、領民の亜人も人間も区別なく扱う少數の貴族がいる中で、それ以上いる貴族の中には税が払えない領民を違法だろうが、合法だろうが関係無く奴隸として売つて私腹を肥やす輩もいると噂に聞いているだけに遭る瀬無い気持ちになる。

シユウが普段暮らしているマイアスの街の領主は、前者であり奴隸市場は存在していない。獣人や亜人の迫害が他の街に比べて緩いのでタマールも安心して暮らしていると語つていた。

帝国では亜人や獸人に對する迫害がある事をシユウは知つてゐる。だからこそ、迫害を受けるタマールを一人で出歩かせたくなかつた。

そして、シユウは長期間帝都にいる可能性もある。

「タマールさん、宿の外に出る時は絶対に俺を連れて行くこと…いいですか？」

だから、シユウはタマールへ釘をさす。
もし、タマールが殺されたり誘拐されたら犯人を絶対に許さないだろう。殺す為、シユウは帝都だろうが、何だろうが炎で包む覚悟があつた。

「どうしたのニヤ？ そんな怖い顔をしニヤくても大丈夫ニヤ。ニヤーは市民権を持つてゐるニヤ」

「ですけど、心配です。もし、タマールさんに何かあつたら…」
心配した顔で見つめるシユウの顔を見たタマールは頬を染めシユウの腕を取つて抱き締めると笑顔を浮かべる。

「じゃあ、シユウさんがニヤー守つてニヤツ」

「もちろんです！」

力強く頷いたシユウへタマールは苦笑する。その眼を嬉しそうに細められていた。

ギルドへ荷物を届けてから近くにあつた店で昼食を取り露店を冷やかして宿へ戻るとシユウの予想を裏切つて待つてゐる人物がいると宿の主人が伝えてきた。

食堂で待つてゐると言つので行つてみると、耳が隠れる長さの長い髪を持つ騎士アンジエラがいた。

前回会つた時は、兜をかぶつており知らなかつたが、天然の紅髪を見ると本当にファンタジーの世界だと改めて認識する。

「あー…すみません。どうやら、お待たせしたみたいですね…」

アンジエラの顔は怒つており、シユウを見つめる瞳は剣呑な光を放つてゐる。

「別に待つていませんわ。さつき来たばかりですから。私が怒つて

いるのは、陛下がお呼びになるかもしれないのに、香氣に街へ出かけた事にです！」

「なるほど…。すみませんでした」

「私が悪いのニヤ。『めんなさいニヤ…』

シユウ達が素直に謝つた事で幾分か気持ちを落ち着かせたアンジエラは、食堂にある椅子へ座る様に促す。

シユウとタマールは大人しく椅子に座ると、アンジエラは一度咳払いをしてシユウへ来た目的を告げる。

「では話を進めます。まず、シユウ殿が持つてきた王殻亀の頭蓋骨が本物と判明しました。明日の朝、私と使いの者が迎えに来ますので一緒に登城してもらいます。申し訳ありませんが、呼ばれているのはシユウ殿だけですので、タマールさんには待つていただくという形になりますが、よろしいですか？」

（よろしいですかって…嫌だって言つても拒否権はないんだろうなあ…）

シユウが隣にいるタマールへ視線を向けると、タマールは気にした素振りも見せず淡々と頷いている。

しかし、シユウには一つ問題がある。

「わかりました。ただ、私は田舎者ですので作法という物を知らないのですが大丈夫ですか…？」

シユウの意識、小山修治は一般人であり、中流家庭で育つた身の上だ。上流階級の作法など習つたこともないし、昔にテレビでやつていたドキュメンタリー番組をチラ見した位だ。

ましてや、この世界の作法など知るはずもなかつた。

だから、不安を口にしたのだがアンジエラはあっけらかんと口を開く。

「明日は陛下との謁見がありますが、クリフ団長も一緒に謁見室に入ります。クリフ団長の後ろを歩いて、同じ様にしてもうれしかば丈夫です」

一国の主と会つて、それで問題無いのかと疑問にも思つが、ここ

はアンジエラの言つとおりにした方が良さそだとはシユウは思った。下手に何か言つて、嘘を教えられて無礼討ちなんて事態になつても洒落にならない。ただで殺されるつもりもないが…。

シユウはホウツと安堵の息を吐きアンジエラへ頭を下げる。

「わかりました。いろいろ教えて頂きありがとうございます」

「いえ…では、私は帰りますね」

そう言つて立ちあがつたアンジエラは出口に歩きだす。しかし、すぐ立ち止まりシユウへ向き直つた。

「おそらく、シユウ殿が皇殻亀をどのようにして倒したか聞かれると思ひますので考え方を纏めておいた方がいいですよ?」

そう言つてアンジエラは今度こそ宿屋を出て言つた。

「シユウさん、どうするのニヤ?正直に全部話すのニヤ?」

部屋に戻り椅子に座つたシユウベタマールは心配そうに声をかける。だが、当のシユウはノンビリとお茶を飲んでいた。

「シユウさん聞いてるニヤ!ニヤーは心配してるニヤよ…」

「大丈夫ですよ。王殻亀を倒した事は事実ですし、心配いりません」タマールは未だ納得していないのか、頬を膨らませてシユウを見つめる。

シユウは、まるで子供の様なタマールへ苦笑し内緒話をする様に耳へ口を近づけた。

「実はですね

」

翌日、シユウが食堂で食後のお茶を飲んでいると昨日言つたとおりアンジエラが迎えにきた。

今日の服装は鎧では無く、黒い軍服の様な物を着ている。

「おはようござります。アンジエラさんも何か食べますか?」

シユウが空いている席を指すとアンジエラは首を横に振つた。

「朝食は済ませてあります。出発の時間はあるので大丈夫ですが、余り遅くなつても問題があるかもしれませんので、急いでもらえる

と助かります」

「わかりました。では、着替えてくるのでお茶でも飲んで待つてください。すぐに戻ります」

タマールは食事を終えていないのでシユウは一人で部屋に戻る。そして、戻ってきたシユウを見た一人は呆気に取られる事になった。しかし、シユウは気にせず元の椅子に座ると新しく淹れたお茶を啜る。

「二人ともどうかしました？」

「……」

「ふむ……何か変な物でも見た顔しますよ？」

そう言つてお茶を堪能していると、シユウの視界にいる一人の女性は揃つて頷いていた。

タマールへ別れを告げ、宿の外に出ると白塗りの馬車が待っていた。2頭引きの大きな馬車の中は広く、上質なクッショーンが使われたシートは程良い反発があり長時間乗つっていてもお尻が痛くならない配慮がされている。

そして、その中にシユウとアンジエラは向かい合つて座つていた。御者が馬車を出し、軽い震動を感じるとガラガラと車輪が回る音と窓から見える街の景色が流れ始める。

シユウが滞在する『獅子の尻尾』という宿屋から王城まで歩いて30分程。

窓から流れる景色の早さから、王城まで大体15分とシユウは検討を付けた。

しかし、広いと言つても密室に女性と一人。

沈黙の空気は重く、息苦しい。何を話せばいいのかシユウは考えるが、特に何も思い浮かばない。まさか「御趣味は?」とお見合いの様な事を言えば良いのかと混乱し始めると天の助けとばかりにアンジェラが話かけてきた。

「その…シユウ殿の服装は見たこと無い物だが、故国の物なのか?」

「まあ、故郷の礼服ではあります」

今のシユウを見たら、誰もが結婚式か成人式にでも行くのかと思うことだろう。

所謂、紋付袴を着ているのだから仕方ない。

これはGUNN OF PATRIOTのイベントアイテムで正月に無料配布されたネタアイテムだった。

中世ヨーロッパの街で日本の着物は違和感を丸出しにするが、一国の王と会うのだから礼服を着た方が良いと判断した結果選んだのがアンジェラの反応は余り良くなさそうだ。

（んー…これしか無いしな…）

シユウが持っている装備に礼服として使える軍服や服はある。だが、素材が防弾防刃防魔と三拍子全て備えており、服というより鎧のような性能になつていて。そして、見た目がこの世界の服装とは掛け離れているので諦め、現実の日本でもある素材を使つて着物にしたのだが、どうやら失敗だつたようだ。

「やっぱり、変でした？」

シユウが恐る恐る聞くと、アンジェラは首を何度も振り慌てた様子で語る。

「いえ…、変と言つより初めて見る服装だったので驚いただけですよ？良く見ると生地も上等なのを使つていてみたいですし、さぞかし高い物なんでしょうね。アハハハ…」

そう言って目を逸らすアンジェラにシユウは軽く凹むが、後日シユウが着ている着物を見た帝室御用達の布商店の主人が、見事な絹布と刺繡に感心し、シユウの元へ訪れると幾らでもいいから売つてくれとお願いに来る事になるが、割愛する。

馬車はシユウが凹んだ以外、特に問題も無く城門を潜り、広い中庭を通り過ぎると8メートルを超える白い石柱が何本も並んで立つ玄関の前に止まった。

馬車の扉が外から開けられ目的地に着いたと告げる。

「では、行きましょう」

アンジェラに促され馬車から下りると入口の両脇に何人ものメイドと深い皺が顔に刻まれた姿勢が良すぎる執事が出迎えて一礼する。執事の老人は、シユウの足先から頭の先を品定めするかの様に見た後口を開いた。

「お待ちしておりました。こちらが、王殻龜を倒したと言われるシユウ様ですかな？」

「そうだ。陛下の御命令でお連れした」

「左様でございますか。では、私どもが御案内いたします。シユウ様、どうぞこちらへ」

シユウは言われた案内に従おうと思い前に出ようとするが、隣に立っていたアンジェラが鋭い目つきでシユウの腕を掴み引きとめた。

「いや、陛下とお会いになる時間はまだあるし、謁見の前にクリフ団長との約束があるのでシユウ殿は私が御案内するので結構だ」

アンジェラの口調には隠しようの無い険が潜んでいるのを感じた。（んー…なんかキナ臭いなあ…。よくある富廷争いでもあるのかも？）

昨日タマールから聞いた話では、現ローゼリア帝国皇帝ヨリアヌス・ヴィ・ローゼリアには、子供は正室との間に授かった3人の娘と、側室の間に授かつた2人の息子がいると教えてもらっていた。

昔の地球でも王女は他国の王族が自国の有力貴族へ嫁ぐ事で縁を深める政略結婚の道具だし、他国の王族を婿に取るより側室の息子を皇太子に据えた方が国内の貴族には良いだろう。

側室の子供が駄目だと言つなら国内の有力貴族の子弟が王女と結ばれる可能性もあるし、選ばれた家は一生安泰になる。
もし本当に富廷争いがあるとしたら、そこら辺の争いだと簡単に想像がついた。

ただ、王子王女の仲は良いとも聞いているので実際の処は謎だ。案外、王子王女の後ろにいる貴族達が勝手に争っているのかもしれない。

ただ、シユウはそこまで考へても自分には関係の無い事だとしか思わない。

シユウは、この帝国の民では無いし、王殻龜を倒したのは自分のやりたい事をするのに丁度よかつただけだ。

アンジエラに付いて行こうが、執事に付いて行こうが、どちらでも構わないし、こんな事に巻きこまないで欲しいというのが本音だった。

「あの…、私はどうすればいいのでしょうか…？」

シユウが睨み合っている二人へ声をかけると執事が声を発する前に腕を掴んでいたアンジエラに引っ張られた。

「こつちだ。時間が無くなってしまう！」

そして、シユウは腕をグイグイと引っ張られ城の中へ連れていかれた。

「アンジエラさん、抜けちゃうから。意外と着物って弱いからー！」
シユウの叫びはアンジエラに届かず、目的地まで離してもらえず、イベントアイテムの着物は意外と丈夫だった事が証明された。

城の中にある騎士団の詰め所、その中にある個室の前にシユウは案内された。

個室の扉をアンジエラがノックし、「入れ」と声を掛けられた後に扉を開けてシユウの腕を引っ張つて無理矢理押し込む。アンジエラは外で待機するようだった。

たたらを踏んで部屋に入ったシユウへ待ちかねた様にすぐ声がかかる。

「御苦労さん。アンジエラが無理をしたようだね」

シユウが大勢を直して部屋の中を見ると声をかけてきた人物が視界に入る。部屋の奥にある書類が積まれた机にいるのは帝国騎士団団長のクリフだった。

「改めて名乗ろうか、帝国騎士団団長クリフ・ローゼンだ」

「ご丁寧にどうもありがとうございます。ご存じでしょうが、私も

改めて名乗ります。マイアスの街で冒険者をしているシュウです。

苗字はありません

クリフは立ち上がりシュウの前に移動する。そして、シュウの服装を見て何か得心したのか一度頷いた。

「まあ、座つてくれ。時間は余り無いが少し話をしたい」

部屋の隅にあるソファーの出口側へシュウが座り、クリフが対面へと座る。

すると扉が開き、アンジーラが湯気の昇るお茶をトレーに乗せて持つてきた。

「どうぞ、イースル産の紅茶です」

シュウとクリフの前にお茶を置き、クリフの後ろへ待機するアンジーラ。

「ありがとうございます。イースル産とは高級茶葉ですね」

「ああ、向こうに伝手があるので取り寄せたんだ」

クリフは皿を下げるでも無く、淡々と言葉を紡ぐ。

イースルは西にある帝国の属国で大陸一と言われている紅茶の名産地でもある。イースル産の茶葉は1番安くとも普通の2倍の値段がするが人気が高い事で知られていた。

シュウもよく紅茶を飲んでいるので、地名は知っていたが流通が少なく手に入れた事は無かった。

そんな高級茶を伝手で手に入れ、一介の冒険者であるシュウに振る舞うクリフは帝国騎士団团长という要素以外でも唯者では無いと言えたし、紅茶を飲む姿が洗礼されており、何と無く華がある様に感じた。

「あー…美味しいですねえ。お茶だけでは無くて淹れ方もいいんでしょうね」

一口飲んだだけでも豊潤な香りとい滋味、そして程良い苦味が舌に生まれる。

これだけの味を出すのには茶葉だけでは無く、淹れ方にコツがあると思えた。

しかし、この紅茶の味からシユウは城に着いてから新たな懸念が生まれる事になる。

(「これだけ高い御茶出して接待しているんだから、絶対何かあるよね…」)

神経質すぎると自分でも思うが、権謀術数渦巻くという言われる宮廷で油断しても良い事はないだろう。事実、城に着いて即刻行われたアンジェラと執事の遣り取りを思い出しシユウは内心で溜め息をついた。

そんな事を少しも出さないシユウのお茶に対する感想にクリフは歯を見せて笑う。

「これが分かるといつ事は、相当飲んでいるな。この紅茶はアンジエラが淹れたんだ。こいつの淹れる茶は美味くてな。つい頬んでしまうんだ」

アンジェラが頬を薄ら染めて、シユウを睨みつけるが、シユウには意味が分からぬ。褒められているのに何故…と思う。

そして、シユウを見るクリフの顔は、ただ単にお茶を楽しんでいる様に見える。

(「んー… 考え過ぎたか? 何も裏はありそうにないけど…。しかし、アンジェラさん… 何で俺をそんな目で睨みますか…。怖いですよ…！」)

女性の睨みとは幾つになつても怖いと感じじるシユウは背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

居心地悪そうに身体を揺すると、それを待っていたかのようにクリフは本心を語り出した。

「シユウ殿、貴殿に頼みがある…」

いきなりテーブルに両手を着き身を乗り出してきたクリフに油断してたシユウは思わず後ずさる。

そんなシユウに頓着せず、クリフの言葉は続く。

「王殻亀を倒した貴殿を、是非とも騎士団へ迎えたい。何も何時どこで死ぬかもわからないその日暮らしの冒険者より騎士団で名前を

得たいと思わないか？」

どうか頼むと頭を下げるクリフの行き成りの行動にシユウは思わず頷こうとしてしまったが、慌てて気持ちの立て直しを図る。

（うわ…やっぱり、裏があつたよ…。しかも、騎士団へのスカウトだし…。それに何時死ぬか分からないつて戦争起きれば騎士団つて一番最初に死に行くんだから、冒険者以上に死ぬ可能性高いんじゃないの？）

何と言つて断ろうか迷うシユウがアンジエラを見ると、アンジエラはクリフの突発的な行動に目を丸くして固まっていた。

（うわあ・・・あの様子から察するとよっぽど珍しいんだろうな今この状況つて・・・）

クリフの行動は、この世界にいる冒険者や騎士志望の若者には絶大な効果があるだろう、だがシユウには無駄としか言えない。

王殻亀を倒した報酬に東アルマダの領地をもらうからだ。その経営を他人に任せようとは思わないし、何より騎士や名誉に興味がない。だから、当然の言葉をクリフに伝える。どんなに頼まれても、頷くつもりは無かった。

「申し出はありがたいですが、私は騎士になるつもりはありませんよ。王殻亀を倒した事で頂ける東アルマダの領地経営もありますしどよりも領民もいません。これから領民を得るために領地を開墾する領主が騎士になつて領地の経営を疎かにすれば領民は集まらないでしようし、それが他の騎士の方や、領民として集まってくれた者達に認められると思いますか？」

クリフはシユウの返事に一瞬顔を赤くしたがシユウの言い分も尤もだと思ったのだろう、一度息を大きく吐いてソファーに座りなおした。

「すみません。私的な事が理由で御断りして」

クリフは首を横に振り紅茶で舌を湿らせる。

「いや、私が拙速過ぎた。確かにシユウ殿の言つとおりだ。これら貴殿は戦うより辛い戦場へ出ると言つのに…。すまなかつた忘れ

てくれ

この会話を最後に、この部屋の言葉は終わる。

アンジェラはクリフの申し出を断つたシユウを仇の様な眼で見つめるし、クリフは王殻亀を倒したシユウの勧誘に失敗した。
(どうしゃりつて言うのさ・・・)

そんなシユウの心の叫びは、当たり前だが誰にも届かない。

ローゼリア帝国の帝都ローゼリアにある帝城には、大小様々な謁見の間がある。

シユウがクリフとアンジェラに連れてこられた謁見の間は、その中でも最大級の広さと格式を誇る真龍の間と言われる場所だった。

4メートルを超える扉の前には金縁され白銀に輝く鎧を着た近衛兵がハルバードを持って立っている。

シユウ達が扉の前に辿り着くと、典令官が名乗りを上げ扉が開かれた。

謁見の間の床と壁は大理石で覆われ、壁には何枚もの絵や旗が掲げられて彩りを添えている。

天井には、一匹の巨大な白い竜が描かれており、ローゼリア帝国の紋章を護っている。

広間には、左に礼服を着た文官。右側に鎧や軍服を着た武官が立ち、壁際には近衛兵が警護に立っていた。

クリフが謁見の間の中央に敷かれた真紅の絨毯の上を進み、シユウとアンジェラはその後ろに続く。

一番奥の高くなつた台座の上には、金剛石やルビー、翡翠等の宝石が散りばめられた玉座があり、その両隣りに玉座と比べると控えめに装飾された椅子がある。

玉座から一段低くなつた場所には、かつて城の前でシユウを見下していた宰相のナイゼルが視線を鋭くしてシユウを睨んでいた。

そんな視線を無視してクリフの後を歩いていると台座の4メートル程手前で止まり、片膝を着いて頭を垂れて臣下の礼を取つたので、

シユウとアンジヨラも同じ様に傳ぐ。

この場にいる文官・武官共に、見なれない衣装に身を包むシユウを見ると囁く様に近くの者と話し始めるが人数が100人以上いる部屋の喧噪は囁き声だとしても大きな音になる。

シユウにはハツキリと聞こえはしないが断片的に「あれが」「まさか」「王殻龜」という言葉が聞こえてきた。

シユウはまるで客寄せパンダになつた様な気がして面白くないが、ここで暴れる程馬鹿でもない。

そのまま数分の時間が過ぎると広間に何の楽器かわからないが、ラップを吹いた様な音楽が高らかに鳴り響き広間の喧噪は嘘の様に一気に沈静化した。

皆一様に頭を垂れて皇帝の入室を待つてると典令官が高らかに帝国皇帝ユリアヌス・ヴィ・ローゼリアの入室を宣言する。

静まり返つた広間に聞こえるのは、足音と布が床に引きずられる音のみ。

息遣いさえ聞こえない静寂が広間を支配する。

「面を上げよ」

ユリアヌスの重いが威厳のある声が沈黙を破り、一斉に衣擦れの音が続く。

ユリアヌスは、中央で傳く騎士を見て口を開く。

「久しいな、クリフ」

「ハツ。陛下に置かれましては、ご機嫌麗しく、この度の拝謁恐悦至極にござります」

クリフは再度、頭を垂れ忠誠を使ひ皇帝に騎士の礼を以べくす。満足げに頷いた皇帝は、その後ろにいる見慣れぬ衣装を着たシユウへ視線を向けた。

「そなたが、王殻龜を倒したといつ冒険者か?名は何と申つのだ?言つが良い」

「はい。シユウと申します。田舎者市井の者故苗字はありません

シユウは床を見つめたまま口を開いた。面を上げよと言われても、それは貴族だけなのか、それとも全員に言つた発言なのか判断しなかつたからだ。

発言の許可は貰えたので素直に言つたが、権力者故なのかユリアヌスの言い方はシユウの琴線に触れてくる。

「ふむ…。市井の者が随分と珍しい服を着ているでないか。お前は何処の国の人なのだ？」

（別の世界からですよ）

そんな事を思いながら、クリフ達に言つた事をそのまま伝える。「東にある小さな国です。随分前に滅びた小国なので言つてもわからないと思います…」

シユウの発言に皇帝のすぐ近くにいるナイゼルが一步を踏み出し、シユウを糾弾するように指さす。

「無礼者が！陛下が聞いておられるのだ、正直に申せ！」

（正直に言えと言つてもねえ…。この世界には存在しないよ？）

シユウは内心焦つたが、そんなナイゼルを止めたのはユリアヌス本人だった。

「良い。市井の者故礼儀を知らなかつたのだろう。許してやれ」

「しかし、陛下…」

「良いと言つている！」

ナイゼル本人は、このままシユウを責めて何としても追い出したい。しかし、國主である皇帝が許したのだ。帝国NO.2の権力を誇る宰相のナイゼルにもその発言を覆す事は出来ない。

「失礼いたしました…」

不承不承と下がるナイゼルを横目に睨んで下がらせたユリアヌスは、シユウへ皇殻亀と戦つた経緯を訪ねて来た。

（遂に来ましたねえ…。じゃあ、りますか）

「わかりました。お話をいたします」

（タマールさんへ説明した、事実とは違いますけどね）

シユウは語る。

森に入つてからの戦闘から、王殻亀に食べられて氣を失つた所までを虚実を入り混ぜて一気に休み無く。

銃で倒した事を魔法に置き換え、倒した魔物の数も大分減らし、王殻亀に食べられた時の魔導機兵の欠損も無くして話したが、大凡事実と同じだ。巨神兵については、森の近くで捨てられていた巨神兵を直して使つたと少し無理があつたかもしれないが、生身で王殻亀は倒せない事を知つている武官達は何も言つてこなかつた。

(タマールさんにもアドバイスして貰つて、捨てられた巨神兵拾つて使うのは違法じゃないと知つてるし。ただ、捨てられた巨神兵の回収率は高くて、よっぽど運がなけりや見つからないつて言われたけど…)

「…………という訳で王殻亀に食べられてしましました」

シユウの説明に謁見の間は静まり返る、王殻亀の他にも事実より減らしはしたが多数の凶暴なモンスターを倒しているのだから誰も何も言えないのは仕方がない。

単機で倒せる様な数でもモンスターでもないから、最初は「嘘を言うな」「デマだ」と呴いていた武官も理路整然としたシユウの説明を聞くにつれて黙り込む。

「王殻亀の体内に入った時は死んだと思いましたが、運良く生き延びられました。そして、暗い周囲を見ると、木材があつたので私はそれに火を付けて明かりにすると剣を片手に持つて暴れました。すると苦しんだ王殻亀が私を吐きだそうとしたので吐き出される途中で剣を突き立てて耐えていたんです。それが偶々、貫いた場所が急所だったらしく王殻亀を倒せたというのが本当の話で、言つのが恥ずかしかつたので他の方に聞かれた時には黙つていました…」

シユウは苦笑を浮かべ恥ずかしそうに俯いて頭を搔く。

もちろん演技だが、見抜ける者は殆どいないだろう。見抜けたとしても倒したのは事実だから何を言ってこようが関係ない。

『偶然倒せた運が良い奴』という評価があればシユウは十分だ。まだ十分な力を持つていらないシユウは、帝国に警戒されるわけにはいかない。

誰もが呻き、何も言わない中でコリアヌスだけが疑問を口にした。

「我には分からぬのだが…」

コリアヌスの疑問に、シユウは一瞬冷や汗を出したが、続けて発せられた言葉に安堵する。

「どうやって王殻亀の頸を落としたのだ？あ奴の皮膚は剣を通さぬぞ」

シユウはホッとして、答えを出す。この答えに予想していたし嘘は殆ど要らないからだ。

「王殻亀の皮膚は外側からですと剣を通さない程硬いですが、内側だと不思議ですが容易に切り裂けます。骨は頸椎の繋ぎ目に力を込めて切断しました。ただ、大きかつたので少し時間がかかり別のモンスターに襲われないかと冷や冷やしましたが…」

実際に近接装備を持つ魔導機兵を新たに出して切断しようとしたが、中々切れず過去に作つた魔導機兵用のネタ武器でジエイソンと名付けたチエーンソウを使って切断した。

切断し終わつた後に、運ぶため小さくしようと腕を振り上げた際、間違えて内側から刃を入れてしまつた結果、簡単に切れた事に気が付いて少し凹んだのは内緒だ。

そして、多数のモンスターを屠つていた為、邪魔は入らなかつた。

「その後、切断した王殻亀の首を何とか巨神兵に持たせて森を抜けました。無理をさせすぎた巨神兵は壊れて使い物にならなくなつてしましましたが…」

「フム…。嘘の様には聞こえないが、本当の事とも思えん。だが、王殻亀を倒したのは事実だな。良いだろう、北アルマダにあるノワールの土地をお前に与える。爵位は男爵だ」

「ハイ。ありがとうございます？」

（あれ…今北つて言った？ノワールつてどこ？）

コリアヌスが立ち上がり、剣を鞘から抜き放ち爵位を授与の準備が始まる。

聞き間違いかとシュウが首を傾げて考えていると、クリフが急いで口を開いた。

「陛下に申し上げたき事があります」

本来許しもなく皇帝に発言すれば、極刑物の罪だ。だが、クリフはコリアヌスの覚えがいいのか、特に気分を害する事も無かつた。

「なんだ？」

「王殻亀を倒した者には、北アルマダでは無く、東アルマダの土地が与えられるはずです。それに北アルマダは一年の半分が雪に閉ざされ、敵国との国境近くにあるはずです」

「フム…」とコリアヌスは呟き、下にいるナイゼルへ尋ねた。

「本当かナイゼル？」

ナイゼルはコリアヌスへ一礼すると一枚の羊皮紙を取り出して確認する様に覗きこむ。そして、弾む声で告げる。

「過去の布告ではクリフ騎士団長の申した通りでござります。ただ、2年前に再布告した際に王殻亀を倒す程の兵を国内に置かず、国境近くの領主へ据える事で帝国の守り手にすると決められており、陛下の裁可も頂いております」

今ここに誰もいなければ、きっとナイゼルは笑い転げているだろう。ニヤける顔を必死に羊皮紙で隠そうとしていた。

事実を言えば、ここにいる1人以外全員が変更された事を知りはない。

ナイゼルは宰相という立場を利用して、シュウが皇殻亀の頭蓋骨を持つて来た日に捏造したのだから当たり前だった。

なぜそんな事が可能だったのか。それは、数多くの重要案件を片付ける皇帝は多忙で、皇帝の裁可が要らない案件は宰相のナイゼルが処理をしていたからだ。

王殻亀が倒される事は無いだろ？というのが、帝国の認識であり重要度も低かった。

運が悪かつたと言えば、それまでだが、今回は運が悪すぎた。

「そんな馬鹿な…！」

クリフは信じられないと首を振る。帝国を守るのが騎士団の務めだ。クリフも当然帝国の法を知っているし、モンスターに関する裁可は必ず目を通している。

それゆえ、今回のナイゼルの言葉に疑問を覚え疑つたのだ。

「おや？ 帝国の法に決められた裁決に騎士団長が逆らうのですか？」しかし、ナイゼルにそう言われてしまえば法を守る騎士には何でもできない。認めたく無くとも皇帝の裁可が出た命令は絶対だ。

それゆえ、悔しさから強く食いしばった歯茎からは血が流れ、握った掌には爪が食い込んで血で汚れている。ナイゼルを殺氣で殺すと言わんばかりに睨みつけていた。

しかし、嵌められた本人。シユウはクリフ程口惜しがつてはいなかつた。

（あー… やられたか…。確かに良い土地だし話がウマすぎると思つたんだよなあ）

そんな程度だ。シユウはノワールという土地を知らないし、クリフが言った1年の半分が雪に閉ざされると言われても何とかなると考えている。1年中雪に閉ざされた土地でも人は生きていけるし、痩せた土地でも育つ食物もある。

そして、敵国へ近ければ、その食物を餌に水面下で交渉しても良いという考えさえ持つっていた。

だから、シユウはハツキリと答えた。

「北アルマダのノワール領主を拝命します」

広間に響くシユウの声。

クリフはシユウの答えに信じられないと首を振り、ナイゼルも罵に嵌めたはずのシユウが何も感じていない事に呆気に取られていた。

「良く言った。帝国の守り手としてよろしく頼むぞ！」

ユリアヌスは、そう言つとシユウへ歩みよりシユウの肩に剣の腹を置く。

本来は、授与者が皇帝の前まで行くのだが今回は真逆になつた。

驚きの声が謁見の間に生まれるが、コリアヌスとシユウは聞こえていないかのように儀式を続ける。

「汝、シユウ・ノワールは、ローゼリア帝国に忠誠を誓い王国の守り手になる事を誓つか?」

(最初から罷に嵌めるよつの国に誓えると済つか?)

「誓います」

心で本音を言つて、口で嘘を言つ。忠誠心の欠片も無い宣誓をして儀式は終わり、シユウは帝国貴族になつた。

後にシユウと親しかつた者の子孫は歴史家達に語つた。

「あの日程、貴族になる事が馬鹿らしく、下らないと思つた事はない」

シユウが、そう言つて笑うと帝国貴族の証であるメダルを海に捨てたと…。

第3話（後書き）

1話から読んでみると、主人公最強物なのに結構主人公やられてね？とか、思つてしまつ作者でした・・・。

次は領地経営に挑戦になる予定です。

最初の計画では戦闘シーンが結構多い作品にしようと思つてたんだけどなあ・・・。

第4話（前書き）

お気に入り件数が28件も・・・。
いつたい何があつたんでしょうか・・・。
ありがとうございます。作者は感無量です。

さて今回は、少し残酷な表現と初めて主人公以外の視点でも少し書いてみました。

また「」で何が言いたいのか、はっきり伝わらない場面があると思いますが、「」容赦ください。

お読み頂、ありがとうございます(――)三

ローゼリア帝国皇帝ユリアヌス・ヴィ・ローゼリアと謁見し、帝国貴族になつて13日後シュウ改め、シュウ・ノワールは帝城の財務管理をする部署の個室で書類と向き合つていた。

「思つたより酷い内容だねえ…」

シュウが呟いて見ている書類は、与えられた北アルマダにあるノワール領の地図と管理収支表、戦力分布図等の各種書類だった。

領民は100人程でシュウの屋敷がある街は50人ちょっとで町では無く村と言うしかない。土地面積約900平方キロメートルと、領民の数と面積の割合が著しくアンバランスだつた。

しかし、山が多く開墾したとしても広い畠は作れない悪条件。

攻められた場合、守り易い立地ではあるが厳しい気候の為、食料自給率も低く、敵対している隣国ナイナック王国との国境まで、直線距離で50キロと離れていない事がこのアンバランスさを生んでいるとシュウにはすぐ理解できる。過酷な環境に加え大凡4年毎にオリンピックが来るような感じで戦火に見舞われ、財産の大半を失うか死ぬ可能性に出会うのだ。誰も好き好んで住もうとは思わない。ならば、こちらから攻めれば良いと簡単に決める事も無理だつた。ナイナック王国は、ノーブル同盟の所屬国だつた。

もし、攻撃をしたらノーブル同盟に加入している多数の国家がノワール領へ総攻撃してくる可能性があるので軽率な行動はとれない。しかし、簡単に攻撃出来ないと言つるのはナイナック王国にも言える。ナイナック王国が単身攻め込めば、ローゼリア帝国の総力で叩きつぶされるからだ。

よつて、戦争の間隔が大凡4年というのはノーブル領対ナイナック王国という形での戦争では無い。

帝国対同盟という互いの自国防衛戦力以外を集結して戦つた後に設けられる戦力の回復期間であり、正確な日数ではない。軍備が早く

回復した方が、相手側へ攻め込むのだ。早くなる時もあれば、遅くなる時もある。ここ10年程は国境線の近くで一進一退の攻防を繰り広げており戦火はノワールに殆ど来ていないのがシユウにはありがたかった。

しかし、ノワール領国境付近にある砦の事が書かれている書類を読むシユウの顔は優れない。

「今は帝国騎士団が出張つてゐるから安心ですけど、宰相と貴族を見る限り期待するだけ無駄でしょうね…」

シユウが自ら望んで得た『運よく王殻亀を倒して貴族になれた』という評価は、帝国貴族内での風当たりを強くした。

運も実力の内と言つ言葉はあるが、例え厳しく殆ど収入の見込めない土地だらうと運で領地を得た事に嫉妬しない者は少ないだろ。それはこの世界にも当てはまる事だった。

最悪、宰相や貴族たちは、シユウを殺す為にノワール領の国境砦に詰めている騎士団を撤退させ、ノーライル同盟の攻撃を誘う位の事は平氣でやるだろ?と思つ。

何故か?

それは、謁見が終わつた日から数えてシユウへ既に10人以上の暗殺者が送り込まれてゐるからだ。執拗に暗殺者を送る誰かは何があつてもシユウを殺すつもりだ。シユウが領地へ行つた後で何かしらの理由を付けて騎士団を撤退させる事は想像に難くない。

「終わったわ」

騎士団が撤退した場合の戦略を考え続けるシユウの後ろに、物音一つせず頭の先まで真っ黒な衣装で身を包んだ影の様な人物が突如現れぐもつた声を発する。

唯一肌が見えるのは目元だけで、褐色の肌と紅い瞳が覗き見えるだけだつた。

「おかえりなさい、リュカさん。今日はどうでした?」

シユウが視線を向けると、頭に巻いていた頭巾を取り外し素顔を晒

す。

銀色の髪を頭の上で結い上げた、美しいが冷たい印象を『える見た
目20代後半のダークエルフの女性だった。

「タマールさんの周囲にいた邪魔者は全て排除しました。『ご命令通り全て首を切つて依頼主の元へ送つてあります』

淡々と報告するダークエルフは自分がどれだけ、恐ろしい事をしているのかを理解しているのだろうかとシユウは思つた。しかし、それを命令したのは自分だ。だから、ただ領き言つべき事を言つ。

「そうですか御苦労さまです」

リュカは労いの言葉を受けると、軽く一礼するし、壁際に移動して目を閉じる。

シユウの視線はリュカを追いかけ、何度も目かになる疑問を口にした。
「しかし、何度も見ても信じられませんね…その美しさで250歳を超えているのですから。本当に250年以上生きているんですか？」

「妖精種は長命ですから…」

目を閉じたまま淡々と語る御歳264歳超の本名リュカ・テドロは完結答える。

せめて、目を開けて話して欲しいと思うが、リュカへ行つた仕打ちを思い出すと無理もないと思つた。

「まだ拷問した事を怒つてているのですか？」

シユウはリュカとの出会いを思い出す。

皇帝との謁見が終わつた帰り道、警戒スキルの警報によつて尾行に気が付いたシユウは送つてもらつた宿に入らず帝都の裏通りにある人ごみの無い倉庫へ入つた。

「ずいぶん早いお客様ですね。まだ何もしていませんよ？」

背後の暗闇に向かつて話かけるシユウの姿は、事情を知らない人が見たら酔つ払いにしか見えなかつただろう。そして、暗闇からの返事は投擲された2本の刃渡り20センチ以上ある大型のナイフ。

「……ツ！」

しかし、ナイフを投げた本人は驚き一瞬固まる。

見たことも無い衣装に身を包んでいる標的は長い裾と袖を持ち、動きにくそうに見える。その広い袖が風を伴って大きく動いたと思ったら、必殺の威力を込めて投げたナイフをいとも簡単に無力化されたのだ。これで驚かない方がどうかしていた。

反対にナイフを受け止めたシュウは反対に緊張もせず、淡々としていた。尾行者に気が付いてから身体強化の魔法をかけ、スキルを使う準備をしていたシュウにとっては、止まっているのと同じだからだ。

スキルをカンストしているシュウの身体強化の魔法は動体視力、反射神経さえ向上させ、始近距離で放たれた矢でさえ容易に掴む事が出来る。

投擲されたナイフなど、その速度に比べるまでもない。

その神業とも言える技を行つたシュウは淡々と感情の籠らない声で語りかける。

「誰の差し金ですか？大人しく教えてもらえると助かるのですが」ナイフの飛んできた方向へ向き直り、何も纏つてない視線は暗闇の中にいる暗殺者へ間違いなく向けられていた。

暗殺者は固まつていた自分へ軽く舌打ちすると、新たなナイフを抜いて低い姿勢を保つまま素早く走り出す。シュウが「ホウツ」と小さく呟く程素早く移動し、スピードと体重を乗せたナイフを鳩尾へ抉る様に突き出してきた。

「ウツ！」

だが、暗殺者は再度驚く事になった。突き出したナイフは間違いなくシユウの鳩尾を付き刺し内臓を抉ると思ったが、刺さる瞬間に光の壁が出現しナイフを弾き飛ばしたのだ。

スピードと体重を乗せた重い一撃は壁に遮られた瞬間、その反動をナイフを握っていた腕の手首へかける。

軽いポキッという音が小さく鳴り痛みに顔を顰めるが、攻撃に失敗し標的から離れようとする本能は無意識の内に身体を動かした。

「グハッ…」

しかし、その本能は無駄に終わる。離れようとする行動より素早い一撃が加えられたからだ。

防御魔法でナイフの一撃を防いだシユウは、暗殺者の頭に巻かれていた布を無造作に掴むと、その無防備な腹へ蹴りを打ち込んだ。シユウの肉体は、ゲーム時代に何度も転生をしたトッププレイヤーの筋力を誇る。

筋力に殆どステータスを振つていなかつたので、軽い蹴りを入れても一撃で死ぬ事は無いが、それでも肉体強化の魔法で筋力は何倍にも上がっており、全力で蹴れば簡単に殺せる程にはなる。殴られ、殴り慣れているボクサーでも内臓を鍛える事は不可能と言われている。

そして、腕の三倍は力があると言われる足の力と肉体強化の魔法を掛けられた蹴りは、たとえシユウが弱くと意識した力でも暗殺者に地獄の苦しみを味あわせるのに十分だった。

腹を抑え、何度も吐いて苦しむ暗殺者を見るシユウの目には感情という二文字は無い。

「早く喋った方が楽になりますよ？でないと、更に痛い目を見ますから」

淡々と確認する声音に、やはり何の感情もない。

この声を聞いた者は、目の前にいる男は単純作業として拷問を行い、無理やりでも口を割らせるだろうと理解する事になる。

それでも暗殺者は首を横に振る。逃げる事を諦めたのか、自害をするつもりなのかは分からない。だから、シユウその意思を挫く一言を伝える。

「自害しようとしても無駄です。私は回復魔法を使えますからね。舌を噛み切つても死ぬ前に再生させてあげますし、毒を飲んでも解毒してあげます。どんな怪我だってすぐに治しますよ。何度もって痛めつけましょう。だから、早く話して楽になりませんか？」

ビクツ一瞬だが暗殺者の体が震えた様に見えた。方法はわからない

が、やはり自害しようと決めていたのか反応は顕著に表れる。

死のうとしても無駄という一言で暗殺者はシユウから見ても本当に怯えている事がわかつた。

シユウの言葉が本当か暗殺者にはわからない。回復魔法を使える者は少ないからだ。

だが、もし事実なら死ぬ事も許されず、拷問で例え死ぬ様な傷を負わされたとしても治療され、拷問が繰り返されるという事が決定したのだ。どんな一流の暗殺者でも耐えられるわけがない。発狂するか泣いて命乞いをする未来しか無いと思うだろう。これで怯え無いという事は無理だった。

しかし、そんな様子を見るシユウはホッと小さく誰にも分からぬ様に息を吐く。

(やつぱり無理はするもんじゃないですね…。)

実は結構限界が近かつた。

殺しに来た相手を殺す事に躊躇はしないが、それでも拷問をするとなると別の話だ。相手を痛めつける趣味は無いし、ドＳな訳でもない。

強いて言えば、少しだけＳが入ってる位だ。

だから、更に痛めつける前に暗殺者の意思を碎く必要があった。そう思つたからこそ、あえて感情を込めず必要なら躊躇はしないと言外に伝えた。

(早く言つてください…。結構疲れるんですよこれ…)

しかし、そんなシユウの気持ちとは、真逆の答えがくる。

「「J...「J「J拷問す…するならややれ…」

ここでは初めてシユウは、自分を襲つてきた暗殺者が女性だと気が付く。

(ちょつ…待つてくださいよ…。初めての拷問が女人つて…どんだけ変態になればいいんですか…)

いきなりの事態に何やら変な方向に思考が飛んでいるシユウだが、そんなシユウを気にすることなく女暗殺者の言葉は続く。

「私は絶対に喋らない。拷問したければすればいいわ！凌辱するならすればいい！だけど、お前は絶対に殺してやる！」

布の間から見える強い光もつ紅い瞳には既に怯えの色は消えていた。その瞳を見たシユウは言霊といつ言葉を思い出した。言葉には力があると云うべきだ。この女暗殺者は自分の言葉を思い込む事で怯えを殺し、意志を固め直したのだろう。

そして、自分の前にいる男をシユウを殺す事を誓ったのだ。シユウの黒い瞳に映る強い殺氣を漲らせた紅い瞳はその意思の強さを表していた。

だから、溜め息を一つ吐き、覚悟を決めたシユウは蹲る女暗殺者が地面に着いていた右手を力を込めて踏みつぶす。

「アツアアアアアアアアツ！」

足裏に靴越しに伝わる肉を踏み潰す柔らかさと、一瞬だけ硬さを感じ、軽い音がした次の瞬間に無くなる骨の感触。そして、声帯を限界まで震わせて発せられる女性の悲鳴が倉庫に響く。

関係のない他人を巻き添えに合わせないように人気の無い場所に移動したシユウだったが、それは暗殺者の女にチャンスを与えたとも言える事だった。わざわざ御誂え向きの場所に標的が移動するのだから躊躇う必要はない。だが、結果的に拷問への助けになるとは皮肉な話だった。

足を退け右手を抱くように庇い涙を流す暗殺者を見て、シユウは再度問う。

「私もやりたくないんですよ…だから、早く喋ってください」としかし、首を横に振る暗殺者を見てシユウの視線が初めて感情が見え隠れする。

暗殺者の右の鎖骨を蹴り碎き、力の入らなくなつた右の一の腕と肘を連續で蹴り碎いた。

「ン――ンウン…」

それでも今度は悲鳴を上げずに残つた左手を口に添えて耐える暗殺者。

眼の光が消えていないなら問答は無用だ。シユウは暗殺者の意志を再度挫くため次々と骨と関節を蹴り碎く。

しかし、何度も骨を折られようが、関節を砕かれようが、何度も悲鳴を上げようが、痣だけの体を地面に倒していようが暗殺者の瞳は強い光を放ちシユウへ浴びせてくる。

既に息をするだけでも辛いはずだ。シユウは暗殺者の顔と頭に巻いてある布を取り外し呼吸を助けようとする。

（まだ話していないのに死なれたら困りますからね…）

暗殺者を痛ぶるのが目的なのか、情報を聞き出すのが目的なのかさえシユウには区別出来なくなっていた。

普段シユウと一緒にいるタマールが今のシユウを見たら、泣いて逃げる事になるだろう。シユウの瞳は異様な光を放っていた。顔を隠していた布を取り外して出てきたのは何度も衝撃を受けたせいで解けた背中まである絹糸の様な銀髪と強い意志の瞳、汗や涙と涎、吐しゃ物などで褐色の肌は汚れているが、それでも美しい顔だつた。

シユウが女暗殺者の顔を見ていると、一やつと口端を釣り上げた暗殺者は小さく一言。

「あたしの勝ちだ」

女暗殺者はブツと口で何かを飛ばし、シユウの首に当たった事を確認すると笑う。

「アハハ！最後の詰めが甘かつたわね。それは南の砂漠に住むガラ輸の毒が塗られた針よ…ここら辺じや、絶対に解毒剤なんかありやしない。お前は死ぬの！アッハハハハ」

シユウはそんな笑い続ける女性を見つめながら首を横に振る。

「無駄ですよ…」

シユウの顔色も呼吸も変化はない。

普通は、既に毒がまわって死んでいているはずなのだ。

暗殺者は、シユウが自分を痛めつける前に何と言っていたのかを思い出す。

「ま…まさか、本当だつていつの？」

シユウは頷きを一つ。

「この場所に来てからには、一度も嘘を言つていませんよ。どんな毒も効きません」

シユウの答えを聞き、暗殺者を支えていた何がが切れた

「ア・・アアアアアアアアア――！」

悲鳴とは違つ、絶望の叫びだつたのか、それとも慟哭だつたのかシユウには分からない。ただ、悲鳴を挙げていた時とは違つた嗚咽と涙を両目から流す姿を見つめ続けた。

そのまま何度も叫び続けていると痛めた身体が筋肉の動きに耐えられなかつたのか、血の混じつた咳を苦しそうに出す。

「ゲホッゲホッ…グツ・・・。お願…殺し・・・て…」

口端から血を流し、シユウへ初めて見せた懇願の眼差し。だが、シユウは首を横に振り同じ質問をする。

「誰に頼まれたのですか？」

「それは言えない…言つたら私は私じゃなくなるから…」

シユウは大きく溜息を吐き、掌を女暗殺者へ向けた。

「貴方の勝ちですね…」

それが、女暗殺者が覚えている最後の光景だった。

「んつ…んう…」

目を閉じたまま意識が覚醒すると、今まで感じた事のない心地よい感触がした。

(何か安心出来るなあ…。この温かいのは何?)

もつとこの心地よさを感じたいと思い、体を動かしてその温かい物に寄る。

「うつうん…」

「べッ?」

心地良いと思っていた物から、艶めかしい声が聞こえ目を開けると、知らない女性の猫人族の寝顔があつた。

「エ…？ 誰？」

大きな声では無かつたが、それでも猫人族の頭に付いている毛に覆われた耳はピクピクッと私の声に反応した。

「ニヤー…」

そう寝むそつな声を出し、目を擦りながら起きた女性は私を見て笑顔を見せる。

「起きたのニヤ。一日間も寝ていたから心配したニヤよ。良かったニヤー！」

豊かな胸を隠す事なく猫人の女性はベッドから降りると肌着と服を着ていく。

着替え終わると状況を把握しようとしている私を見て声をかけてきた。

「もう少し寝ているニヤ。ニヤーはご飯を貰つてくるのニヤ。まずは落ちた体力を回復させるのが先決ニヤ？」

それだけ言って出て行こうとする猫人族の女性に私は慌てて声をかける。

「あの…アナタは誰なんですか？ それと、ここは…？」
「ニヤーはタマールというニヤ。ここはニヤー達が泊つている宿ニヤー」

それだけ言つて扉から出て行く。

普段なら絶対に、こんな呆けてはいられないが体中が痛い。

ボウつとして考える事が出来ない頭が煩わしい。

タマールという女性が助けてくれたのだろうかとも考えたが、頭を振つて否定する。

「あの男がそんなに甘いとは思えない」
(ならば今の状況は?)

そう疑問に思つた。捕虜だつたらこんな待遇は望めない。ならば奴隸かと思うが、それも違うと思う。

縛りもせずに部屋に一人で放置する何てありえない。罷かとも思えたが、部屋にいたタマールに殺氣や警戒の様子は無いと言える。

暗殺者は空氣に敏感だ。タマールに裏は無いと断言できた。

ならば、タマールは何も知らないで世話をしてくれていたのかと思ったが、そんな危険な事をあの男が許すとは思えなかつた。

どうじう巡りの思考に捉えられながらも、まだ重い体を動かして逃げようとしてベットから降りて立ち上がつた瞬間、田の前のドアが開かれる。

「え…？」

田の前には、自分を半殺しとは言えない、ハ割殺しにした標的の男、ショウを確認した瞬間。

「 ヒイツー！」

自分の口から出たとは思えない悲鳴を聞きながら、逃げる様に部屋の壁際へ移動する。

「ナッななな…何であなたが、いるのよ…」

急いで離れ、自分でも何を言つてているのか分からぬ声を出す。そして、動けた自分を初めて疑問に思つた。

（あれ…確かに全身の骨を折られていたんじゃ…）

まだ熱があり、フラフラするがそれでも強い痛みを伴つ記憶は鮮明に蘇つた。

そして目の前にいる男の掌が自分の顔に被さつた所で記憶が途切れている。

混乱している私を見た、目の前にいる男は苦笑して頭を搔くといつて言つた。

「私は暗殺者としての貴方に負けました。だから、助けたんですよ」

「は？え？だつて、私はボロボロにされて…」

意味の分からない返答に混乱する私を見て、標的の男は言葉を続ける。

「私は貴方から情報を聞きました。だから、私の負けです」

（は…？情報を言わなかつたから？当たり前じやないの？）

この発言に私はキレた、250年以上生きて一番キレたと思つ。余

りにも馬鹿にした発言だと思ったのだ。

「ちょっと待つてよ！アナタに手も足も出さずに倒されたのよ！それが私の勝ちだなんて馬鹿にしているわー暗殺者が情報を漏らさないなんて常識じやない！」

だけど、標的の男は淡々とした調子を崩さない。

「私も最初はそう思つてたんですが、あなた以外の方はペラペラ喋つてくれましたよ」

そう言つて笑う男は私が今まで会つたどの男とも違つた。

（何で？私は、あなたを殺しに来た刺客なのに、何でそんな顔で笑えるの？）

シユウが浮かべている無邪気な笑顔は何の警戒もしていない様に見える。まるで、子供が無条件に信じている親へ向けるような笑顔だ。決して拷問の結果を話す時に浮かべる顔の類ではないし、自分を殺しに来た暗殺者へ向ける顔でもない。

その顔を見て私は冷たい汗が止まらなかつた。

私は10歳で刺客になつてからの250年以上の長い暗殺者生活で出会つたことの無い、この男を異常だと思つた。

最初は強者の余裕かとも思つたが、そんな男は今まで何人も見てきている。この男は違うと断言できた。

私はこの男が持つ異常さが恐ろしい。それと同時に、全力で殺しに來た私をいとも簡単に無力化したこの男に強く惹かれた。だから、思った。私が感じた当然の疑問を口にする。

「何故殺してくれなかつたの？」

男は笑いを納めると、当然の様に言つた。

「

」

「何故殺してくれなかつたの？」

シユウは数瞬の思考を行う。

確かに、自分を殺しにきた暗殺者を助けるなど普段は絶対にシユウはしない。

今まで命乞いをしてきた相手はいたが、全て殺している。可能なら殺される前に殺すというのが大前提だつたからだ。

だが、この暗殺者は助けた。だが、シユウは感じてしまった。

全身の骨を砕かれても自分を貫き通すこの暗殺者の強さを。この女性を欲しいと思つてしまつた。

だから、正直に話す。

「暗殺者の貴方が美しかつたからですよ。私は貴方が欲しい。だから、助けました」

自分の正直な気持ちを伝えると、目の前にいる女暗殺者は顔を褐色の肌でも分かるほど一気に赤く染め、両手を振りながら慌てた様子で口を開いた。

「ちょ… ままま待つてよ…。欲しつて言われても、私250歳超えているお婆ちゃんだよ？ 亜人だよ？ 確かに見た目は若いけど、歳の差つてもんが…」

（はて… 200歳超えていても体力的にも問題ないよな？ 僕殺しに来たんだから現役じゃないの？）

「歳の差も亜人とかも関係ないですよ。私は貴方が欲しいんですから。あ… やつぱり、俺見たいな男と一緒にいるの嫌ですか？」

「べ… 別に嫌じやないわよ！」

顔を赤くして即否定する様子は違和感をシユウに与えたが、特に気にしないでおく。了承はしてもらえたのだ。それで十分だつた。

「もし、俺に仕えて一緒にいる事を不満だと感じたら何時でも来てください。その時は全力でお相手します。えーっと…」

「私の名前は、リュカ・テドロよ。見ての通りダークエルフ」

この時、さつき感じた違和感の正体にシユウが気付いていれば後の歴史は変わつていたかもしれない。

シユウの発言は、暗殺者としての腕が欲しいという意味で言つていたつもりなのだが、リュカには男女としての発言に取られていた。

「全力でお相手します」という言葉を想像して顔を紅くしたリュカを見たシユウは、熱が上がつたのかと思いリュカを抱き上げて優しく

くベッドに運んだ。

シユウは寝かせたりュカの額に掌を当て、熱を測る。

「熱がまだありますね。体に優しい食事をタマールさんが頼んでいたので、それを食べたら寝ましょうね」

掌を外し、毛布をリュカの肩までかける。すると、リュカはシユウの手を握つて少し震えた声を出す。

「少し寒いの……」

「では、もつと毛布を借りてきますね」

シユウが立ち上がろうとすると、握つた手の力を強くしリュカは首を横にふる。

（はて……寒いのでは？）

シユウが首をかしげてリュカを見ると、リュカは震える「あなたで温めて……」と続けた。

シユウは、この発言で固まつた。

暗殺者に襲われても平然としていられるが、まさか自分を殺しに来た暗殺者に抱いてくれと言われるとは思わなかつた。

（いやいや……までまでまで……ちょっと、待とうか。落ち着こうよ俺……）

シユウを見つめるリュカは、冷たく感じる美貌と熱く潤んだ紅い瞳、上気した褐色の肌が何とも言えない色香を醸し出している。

（罷か？罷なんか？でも、罷でもいいか……）

シユウは、この世界に魅了魔法は存在しないと言われても信じないだろう。それほど強くリュカに惹かれていた。

思考は既に麻痺し、リュカへ体が移動する。

この時のリュカは確かにシユウへ惹かれていた。恐ろしくもあつた。敵わないと思うが殺す事も諦めていない。情事の後に寝首を搔く事も考えていた。

もう少しでシユウの体がリュカへ届く。

しかし、あと少しという所で扉が開かれ闖入者が乱入する。

「ニヤー、お待たせだニヤー？」

部屋に入つて来たのはタマールだつた。手にはリュカの為に持つてきた食事がある。

「「……」

固まつている一人を見たタマールは、ただ一言。

「シユウさん、病人に無理をさせちゃ 駄目ニヤ。ニヤー以外の女の子に手を出してもいいけど、元気になつてからにするニヤ」

怒る事も泣く事も泣く平然と言つだけだつた。

そこまでシユウは思い出し、手が止まつていた事に気が付いた。

慌てて手元に残つた食料自給率が書かれた資料と意識内にあるアイテムを確認して一つ頷く。

「うん、食糧は何とかなりそうだな…。後は何か産業を興せねば丈夫なんだけど…」

シユウが呟くと壁際にいたリュカが小さい声を出す。

「あの地域は昔は鉱山が多くつたわ。山が沢山あるなら、まだ探せば何かしらの鉱山があるんじゃないかしら」

シユウが今まで見た資料には、そんな記述は無かつた。

「リュカさん、何でそんな事知つているの？」

すると、リュカは小さく笑つてシユウに柔らかい視線を向ける。

「伊達に長生きしていないわ」

その発言にシユウは苦笑する。

「歳の事言うと怒るくせに…」

リュカは壁から背中を剥がしてシユウの近くまで歩く。

シユウの頭を軽く小突いた後に、抱き抱え耳に熱く小さい声で囁いた。

「怒られたくなかったら、今夜もいっぱい苛めてね」

そう熱っぽく呟いて、部屋を出て行こうとするリュカへシユウは疑問に思つていた言葉を投げかける。

「最初誘つて来た時に俺を殺すつもりだつたでしょ？何でその後は諦めたんですか？」

リュカは笑顔を浮かべ振り向くと、首を傾げる。

「私の始めてを二つも奪ったからよ？」

シユウは首を捻つて何を奪ったか考えるが、思い浮かばない。降参
とばかりに、手を上げ答えを聞く。

「私の暗殺初黒星と」

最後の言葉は扉を閉める音で聞こえなかつた。
ただ、リュカの顔は幸せそうに笑つていた。

北アルマダ、ノワール領へ向かうまで残り約一ヶ月。

後一か月程でノワール領は雪解けの季節になる。それまでに出来る
限りの準備をしておく必要があった。

シユウは読んでいた書類を片付けながら思つ。

タマールとリュカ。愛しい獣人と亜人を悲しませない為にも、自分
の為にもやれる事はやろうと。

「まずは今晚を生き残らなくては……」

愛しい一人の仲が良い事に安堵を感じるが、その分負担が増えたシ
ユウは溜め息を吐く。

だが、それは自業自得としか言えないだろ？。

第4話（後書き）

ちょっとMなダークエルフのお姉さまといつ感じで書いてみたんですけど、いかがでしたでしょうか？

タグについているロボットが最初以降殆ど出ないといつ事に焦りを感じ始めている作者ですが、次は戦闘シーン多めで書いてみたいと思います。

ただ、文才が無いので少し時間がかかるかもしません・・・。

第5話（前書き）

あれ・・・見間違いかな？（・・つ）「ヨシヨシ
お気に入りが85件つて・・・へ？（。・。・）

いつたい何が起きたのか・・・お気に入りが一気に増えて、マジで吃驚しています。

毎回同じ事を繰り返す様で心苦しいですが、読んでください、本当にありがとうございます。

今回も稚拙&弱々な内容ですが、楽しんで頂ければ幸いです。
申し訳ありません、前回のあとがきに書いた戦闘シーンですが今書

いている最中で今回は入れられませんでしたm（—）m

その日の早朝、シユウはタマールとリュカを連れ帝都ローザリアにある工業地区にいた。

二十日後、シユウ達は帝都を離れ、北アルマダ地区にあるノワール領へ出発する事が決まっている。その前に、ノワール領の地図を見て考え付いた計画を検証するためだ。

シユウ達は数本の筒を持つてとある鍛冶屋の作業場へと入つていった。

「こんにちは。ロイドさんいますか？」

作業場には十代半ばの人間の少年が道具を磨いて作業前の準備をしていた。

シユウに気がつくと少し待つていて欲しいと言つて奥へ走つて行く。十分程経つと、赤ら顔をした顔中に髭を生やす身長百一十センチ程のドワーフが出て来た。

「おー、坊主じゅねえか。どうしたんだ？」

シユウの腰程しか無い身長で、手に酒瓶をもつているこの男が、この鍛冶屋の店主ロイドだった。

「朝から飲んでいるんですか？」

「こりゃ水だよ水…。少し酔う効果がある不思議な水だよ…」

（それは普通にお酒なのでは…）

シユウの田の前でラッパ飲みしているロイドはシユウの持つ筒を見ると、瓶を口から筒へ向ける。

「そりや何だ？隨分沢山あるみたいだが…」

シユウは実に良い笑顔をロイドに向けてから口を開く。よくぞ聞いてくれましたとでも言いたげだ。

「先日話した事を覚えてますか？」

ロイドは記憶を探る様に視線を上に向け、ハツと田を見開いた。

「ま…まさか、馬より早く移動できるってあれか！？」

シユウは「正解」と一言呟いて、筒の中に丸められていた一枚の羊皮紙を机に広げる。

書いてあるのは、設計図だつた。寸法をこの世界の数字で表しているが、読める者はその大きさに驚くことだらう。

「スターリングエンジンという外燃機関の一様です」

ここでは詳しい説明を省くが、簡単に言うと構造が簡単で温度差があれば動かせる便利なエンジンだと考えてもらえばいい。問題は内燃機関（ガソリンエンジン等）に比べて大きさの割に出力が低い事だ。

シユウが考えた事、その一つは恒久的に動力を得る事だつた。

機構さえ工夫すれば様々な事に応用する事が可能だ。もちろん、一定以上の精度は必要だが、ピストンやシリンドラー、パッキン等の重要な箇所はシユウが持つ魔導機兵のパートを使えばクリアードできるし、この世界でも代用品はあるだらう。

シユウが調べた結果、この世界にある金属の種類は地球に存在しない物も多い。落ち着いたら地球に存在しない金属の特性を調べたいと思うが、今は時間も無いし、知識もない。

エンジンを使う材料の選定も出来ないので。ならば、専門家に聞けば良いと思い、帝都で腕の良い鍛冶屋を探してたらロイドと出会つた。

シユウの話を最初は信じず馬鹿にしていたロイドも詳しい話を聞いていくと真剣になり、図面を持つてきたり相談に乗るという話になつた。

（何が役立つかわからない物ですね…）

この世界は魔力社会であり科学文明は地球の中世と大して変わらない位でしかない。

そしてシユウの持つ知識は科学文化溢れる現代だ。紙さえ高級品の時代に安価に大量に作れればどうなるか想像して貰えれば判り易いだろう。

それが高級品で需要がある紙を作るのは無く、いつかは必要にな

るだろうが、未だ需要が不明はエンジンを造るのだから先端を走つていいのか、ただの暴走なのか謎な処だが。

「ふむ… スターリングエンジンねえ…。随分と単純な構造だな。この高温部つてのは何だ?」

手に持つた酒瓶を口に当てガブガブと飲むロイドにシユウはニヤリと口角を上げて答える。

「そこは熱する場所ですね…。およそ最高で千一百度、最低でも八百度と考えています」

ロイドはシユウが笑いながら答えた数値に酒を噴き出した。

「ブゥツ… ゲホツウエホ… お前は火山にでも落とすつもりか!」

「よくわかりましたね」

「冗談で言つたつもりが、まさかの正解と聞きロイドはシユウの正気を疑い始める。

しかし、淡々と答えるシユウの顔は真剣であり、嘘を言つている様には見えない。

シユウはピストンとシリンドラー、内部に封入した气体が通る本体部を指し示す。

「この場所は摩耗と温度変化があります。温度差も最低八百度以上と考えてください」

ロイドは、呻き声を上げ自分の知識を探る。鍛冶師になつて七十年を超えるが、ここまで無茶な注文は初めてだった。
確かに予算を度外視すれば、造る事は可能だ。

ロイドはシユウがノワールの領主になり、二十日後ノワールに行くと聞いていた。だが、殆ど収入の無い領地をもつた領主に払える額ではない。

広大で肥沃な領地を持つ貴族にも払える額でも無かつた。例え実行しても材料の一割も集める事はできないだろう。

ロイドは首を横に振り、大きく溜め息をついて語る。

「材料に当たるが、帝国中の商会と鍛冶屋から手に入れないと足りん。職人の賃金やら輸送費も含めれば最低でも十億Gは必要だ

ぞ…

「十億G…ヤー。」

「十億G…」

シユウの後ろで興味本位に聞いていた、タマールとリュカは余りの大金に卒倒しそうになつてゐるが、シユウは何も言わなかつた。ロイドの顔色から無理だと思つていたが可能だと聞いて喜色を浮かべただけだ。

シユウは即答する。時間が経てばすぐに回収可能な金額だと思つたし、シユウの意識化にある数字の表示は十億Gに足りないが、その金額の九割以上をクリアしている。

他に考へてゐる事も実行できれば実現に時間はかかるが、今の時点で書いて来た図面の寸法でスターリングエンジンを造る事はない。「では、一年後に十億G払いましょう…」

「一ヤーーーーー！」

「ちょ…シユウ君…つて…えつ…ちょつタマールさん、起きて、起きてつ。タマールさん氣を失つちや駄目よ…」

シユウの言葉を聞き、タマールが氣絶し、シユウを止めようとしたリュカは卒倒したタマールを倒れないように支えた為に言葉を続ける事が出来ない。

ロイドは弟子の少年を呼んで氣絶したタマールを運ばせ、リュカはタマールに付き添つ為、この場を離れた。

設計図を乗せた机を挟み、シユウとロイドは向かい合つた形で残される。

ロイドは少し苛立ちを混ぜた声でシユウに問いかけた。

「なあ…坊主、俺をからかつてゐるのか？話をちゃんと聞いていたのか？確かに十億あれば即決で集まるだらうよ。だが、普通に考えて払える額じやないだろ」

ロイドは信じられなかつた。田の前にいる見た目二十代の人間種の男に払える訳がないと。

確かに普通はロイドの想つようすに払える訳がないと思つ。だが、田

の前にいる男は普通ではない。

だから、シユウはロイドの質問に答え、ロイドに尋ねる。

「今の段階で一年後に十億Gもの大金は払えませんが、明日になれば判りません。ただ、払える可能性はありますよ。それに時間をかけるのも無駄じゃないですよ。小さいのを作つて調べる事で性能を上げる研究は出来ますから。それで、どこに何の金属を使えばいいですか？」

シユウは図面の各部品を指差しロイドの答えを待つ。

「ハツ…ダーツハハハツ」

ロイドは笑い声を上げ設計図を乗せている机をバシバシと叩いた。朝から大量のお酒を飲んでいるロイドだが、急に笑い上戸になつた訳でもない。

ロイドが笑つた理由、それはシユウが本氣でやうひつとしている事を理解し、馬鹿馬鹿しいまで愚直に進む姿を面白こと思つたからだ。ロイドは今年で九十歳を超える。

鍛冶師になってから只管働き、四十年前に帝都に店を開いた。亜人とこうだけで差別を受けもしたが、それでも帝都で名の知られた鍛冶師だ。

シユウの様なぼつと出の貴族より、もつと上の貴族に仕事を頼まれた事もある。鍛冶師として子供や孫に自慢できる依頼もこなしてきた。だが、ここまで馬鹿で面白い話は無かつた。

しかも、シユウまだ他にも同様の計画があると言つ。

これで興味の沸かないドワーフはない。

「いいだろ。俺が責任を持つて教えてやる。十億G準備出来た時の為に、明日にでも坊主へ商会も紹介してやる。ただし…」

「ただし？」

（何だろ？権利よこせ！とかだったら困るなあ…。使ひようによつては軍事バランス崩すし…）

シユウはロイドが途中で黙り戦々恐々とした。

そして、ロイドは腕を組み、鼻息を荒くして重い口を開く。

「俺もこれを造りにお前の領地へ一緒に行く…研究もせん
「はい？」

ロイドの発言に驚いた声を出したのはシユウでは無くタマールを運んで戻ってきたロイドの弟子だった。

「親方、店はどうするんですか！依頼の品だつてあるのに、やばいつすよ！」

しかし、ロイドは頑として譲らざる弟子を睨む。

「うるせえ！お前も鍛冶師の見習ならこんな面白い話は滅多にねえと思うだろ！急ぎの依頼以外全部断つちまえ！この店は閉めて坊主の領地で店ひらぐだ。まだまだ坊主が面白い物を造りそつだからな！」

例え断つたとしても付いて来そうな剣幕だ。弟子の少年が「そんなあ…やつと恋人できたのに…」と男泣きしているがロイドは五月蠅いとハンマーを投げて黙らせた。

シユウにはロイドの申し出はありがたい。だが、来るなら言つておかなければいけない事がある。これからシユウがやる事は危険を伴うのだから。

「えーっと…ロイドさん、私からもう一つ条件が…」

ロイドは視線を弟子からシユウに向け直し髪をなでる。

「ふむ、言つてみる」

シユウは軽く咳払いをしてから、姿勢を正してロイドの皿を見て話す。

「では…まず一つ目、これから造つていく物は使い方によつて容易に人を殺せる事ができます。他の人に知られるのは時間の問題ですが、それは遅い方がいい。まずは、私の領地で試して問題無く使えば広めてくれて構いませんから、それまでは内密にお願いします。ただ、大きい物もあるのでロイドさん以外の職人も必要ですし、大工や他の職人も必要です。信用出来る人を帝都で顔の広いロイドさんに誘つて欲しいのです」

ロイドは簡単に頷いて先を促した。

（そんな簡単に頷いていいの？まあ、頼むだけなら大丈夫なのか…?
？ただ、これで集まらなかつたらどうしよ…）

「一つ目、私の領地は人も少ないですし、貧しい土地です。もちろん改善はしていきますが、失敗するかもしれません。ロイドさんが帝都に戻る可能性もあり得ます。その事を理解しておいてください」

ロイドは髪を撫でながら一つ頷きシユウの腕を軽く叩く。

「お前は何を馬鹿言つているんだ？失敗したつてやりなおせばいいじゃねえか。こんな計画を立てるお前が失敗するなら誰だつて失敗しちまうよ。俺は坊主が出した条件を飲むぞ」

ロイドが快諾し、シユウの計画が一歩進んだ翌日、ホンジオ商会という名の帝国国内と周辺国に多数の支店を持つ商会を紹介してもらったシユウは、新たな問題に直面する事になるのだが、それはまだこの場にいる誰も知らない。

第5話（後書き）

今回の話に出てきたスターリングエンジンは作者が学生時代専攻していた分野です。学生時代を思い出して書きましたが、結構忘れていて苦労しました・・・。
次こそ戦闘シーンを・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3090ba/>

GUNZ OF PATRIOT

2012年1月10日21時34分発行